

A c a n t h u s

新入生歓迎号

平成22年3月19日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

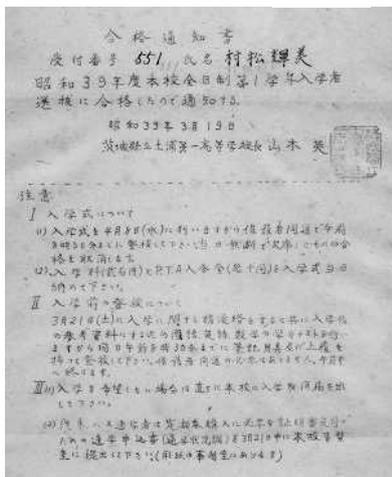


菊田氏は中7回の卒業で、後に真鍋町長をなされた方です。
村松氏は高19回の卒業で、昨年度まで本校の校長、現在は土浦日大高校の校長先生です。

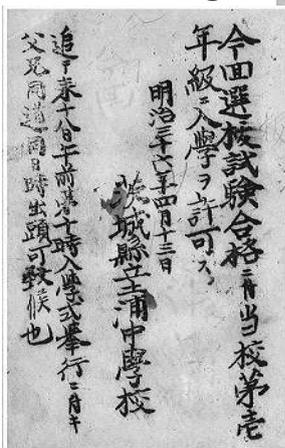
青春切符を携えて

晴れて土浦一高の合格通知を手に入れた皆さん、合格おめでとう！ 本校は明治30年に創立されましたので、皆さんは百十四回目の入学生ということになります。
①は今から百七年前の明治36年の入学許可通知書です。入試合格と入学式の案内がはぎで知らされました。日本が朝鮮半島の支配権をめぐってロシアと鋭く対立していたころ（翌37年に日露戦争勃発）のもので、体裁や文面に歴史を感じますね。②は四十六年前の昭和39年の合格通知書です。新幹線が開通し、東京でオリンピックが開催され、日本が高度経済成長を遂げつつある頃のもので、決して上質とはいえないワラ紙にガリ印刷という合格通知にしては、ちょっと事務連絡的な軽い感じがしますが、これを受け取った当人はずっしりとした手応えを覚えたに違いありません。

②



①



皆さんの合格通知書はいかがでしたか。この合格証は、全国でも有数の難関校の一つである土浦一高の入試を突破した努力の証しであると同時に、洋々たる未来に向けて旅立つ皆さんの青春切符なのです。これを手にこれからの一高生活を思う存分謳歌してください。

土浦一高の春秋

③は①の通知書にある菊田禎一郎さんが入学した土浦中学校（明治32年、現在の土浦二高の地・立田町に新築された）の写真です。

③



④

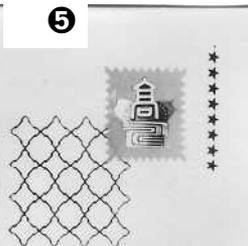
菊田さんは、この校舎二階の講堂で行われた入学式に臨んだ筈です。しかし、この校舎は新設された女学校に譲り渡したため、この後は明治37年に建てられた現在の真鍋台校舎で学び、ここから巣立って行かれました。④は創建当時の真鍋台校舎です。百年余り前の建物ですが、明治を代表する洋風木造建造物として国の重文に指定されており、本校のランドマークとして聳え立っています。

⑤は②の通知書にある村松輝美さんが入学した頃の一高の校内点描です。左上の建物が戦時中に建てられた講堂です。右下の二階建ての建物は、昭和35年建築の、規模や施設面で当時北関東一ともいわれた図書館です。しかし、どちらも現存していません。

百年歌い継がれてきた校歌

本校の校歌は明治44年に制定されましたので、来年百年目を迎えます。字句等一部改変はあったものの殆ど元のまま現在に継承されています。明治33年に制定された校章も戦後、新制高校になって改められましたが、⑥のように基本的なデザインはそのままです。校歌ほど古くはありませんが応援歌（第一応援歌）も誕

⑤



生したのは昭和25年ですから六十年間も歌い続けていることになりました。入学早々体育の授業で苦勞させられる「一高体操」が考案されたのもそのころです。長い時の流れの中で消えていったものもありますが、脈々と受け継がれて今に息づく一高の伝統文化は数多くあります。培われてきた力もあります。
この春、本校生徒三十八名は米国への海外研修に出かけます。ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、スミソニアン博物館、NASAケネディスペースセンターなど世界最先端の研究機関を訪れるものです。こうした普通では近づくこともできない研究所などで研修が可能になったのは、全米各地の大学や企業などで活躍している本校の卒業生たちが、土浦一高海外研修の企画を聞きつけて奔走してくれた結果なのです。同窓生の力強い支援に改めて土浦一高の伝統の力を感じました。進修同窓会は皆さんと共に在ります。



TSUCHIURA DAIICHI HIGH SCHOOL

A c a n t h u s

第 2 3 号

平成 2 2 年 4 月 2 0 日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会日本館活用委員会

去る 4 月 11 日 (日) , 今年度の進修同窓会総会が開かれました。応援指導部・吹奏楽部・弦楽部の皆さんによる一高讃歌・応援歌や校歌の演奏で始まり、生徒活動特別補助費などを含む本年度事業・予算等が審議・可決されました。海外研修報告もありました。総会に続いて毎年恒例の周年祝賀式が挙行され、卒業 60・50・40・25・15 周年にあたる会員が列席されました。



戦後の土浦中学校

来る 4 月 22 日は本校の百十三回目の創立記念日です。明治 30 年 4 月 22 日に、茨城尋常中学校 (現水戸一高) 土浦分校として土浦城本丸の仮校舎で授業を開始したのです。三年後に土浦中学校として独立するわけですが、中学校創立当初の様子については、(下) 左まじり Acanthus で度々取り上げてきましたので、今回は戦後の土中から新制土浦一高への移行期に新しい学校の指針確立を目指した新校訓制定の経緯を紹介したいと思います。

今年卒業 60 周年を迎えられた方々は戦時中の昭和 19 年 (1944) 4 月に土浦中学校に入学しました。一日のほぼ半分は体操・軍事教練・武道や作業などでしたが、英語も含めて授業は行われていました。しかし、戦局の悪化にともない翌 20 年に入ると二年生も (三・四年生はすでに軍需工場などへ動員されていた) 阿見の海軍航空廠へ動員されました。学校は一年生だけになりましたが、その一年生も各地域の農家に動員されたり、校庭を開墾したりの農作業を行うなど殆ど授業のない生活でした。そして 8 月に終戦。

戦争が終わると、動員されていた二年生以上の生徒達が学校へ戻ってきましたが、終戦直後の混乱は続き、10 月になってようやく授業を中心とする学校生活ができるようになりました。しかし戦中・戦後の疎開等による編入者の増大 (昭和 20 年の編入者数は 521 名、21 年 9 月の生徒数は 1638 名) で教室には生徒があふれ、一・三年生は午前、二・四年生は午後という複式授業が行われました。満足な教科書もなく、物資不足、とりわけ食

糧難のなか、空腹を抱えての毎日でした。

新校訓誕生の経緯

戦後まもなく「教育に関する四大改革指令」など 5 本の指令による、日本社会の民主化は着々と進められましたが、当時、土浦中学校の今宮千勝校長は「終戦直後は極度な混乱がわが教育界にも襲って来て、教師は教育の指標を失い、生徒は修業の拠り所を失って空白の巷に彷徨した・・・また文部省からして明確な教育上の根本方針も示されず、まして新時代教育の具体的内容に至っては五里霧中の実情。」(土浦一高進修新聞 27 号・昭和 32 年刊) と心を痛め、新しい時代に相応しい人生の指針の必要性を痛感していました。そして昭和 21 年 4 月、新校訓制定に取り組み、5 月の職員会議に校訓制定の基本的方針を示し、校訓制定委員会を組織しました。今宮校長の考え方は「大方の校訓は、ともすると校長一個の志向から出て、或は某古典の中の名文句などを抽出して一方的に作られがちであるが・・・校訓はそうした経緯で作られるべきでなく、・・・校長も職員も生徒も三者一体となって生み出されるべきだと固く信じている」というようにきわめて開明的なものでした。

委員会と職員会議で討議を重ね、生徒の声にも耳を傾け、総意を結集して新校訓は生み出されました。今宮校長は『自主 独立に徹し、 協同 大和をなし、責任 本務を果す。この三者が一丸となって人格の核に育まれるならば、新教育の精神に則る学窓生活はいうまでもなく、これが一体となって人生の行路を照らせば、どんな境遇職域にあ

第 8 代校長今宮千勝先生



校訓「自主 協同 責任」徳富蘇峰書

(この校訓額は現校長室に掲げられています)

つても確固不磨の人生訓となり凡百の諸徳目これに従って生れると解されるではなからうか。』と混乱の中から心胆を砕いて生み出した校訓の精神を存分に生かして欲しいと述べています。

こうして、新校訓は「日本国憲法」が公布された昭和 21 年 11 月 3 日に制定されました。卒業 60 周年を迎えられた先輩たちが中学三年生の時でした。

「日本国憲法」が施行され、本格的な政治体制の改革がスタートするのは半年後の翌年 5 月 3 日であること、また、この憲法の精神に基づいた教育の根本法である「教育基本法」が公布されたのがやはり翌年の 3 月であったことを考えると、これらに先行して制定された本校の新校訓は、新しい日本の方向性を適確に捉え、学校が一丸となって創造したものとして極めて価値あるものといえます。

六十年前にできた本校校訓の至高と意味深さに改めて感じ入るばかりです。

平成22年5月14日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



前号で戦中・戦後の土浦中学校の様子を記しましたが、今号もその時期の話題を取り上げてみたいと思います。旧本館の資料展示室にコンクリート製の袴姿の胸像（左の写真）があるのをご存じでしょうか。陳列台に「藤田東湖像」との標示があります。本校の歴史にかかわる文物を展示しているこの部屋になぜ「東湖像」があるのでしょうか。太平洋戦争末期、国は国家存亡の危機に際し、中学生まで戦力として動員する体制を強化しました。若人の戦意を鼓舞し、皇国民として国に殉じる精神を培う目的で、幕末の尊王攘夷論者をこの時期の中学校に登場させたものと思われます。

軍国主義教育の強化

日中戦争の長期化にともない、昭和12年には国民精神総動員の運動が起こり、軍部の検閲などによって言論・出版・集会の自由が拘束され、昭和13年には国家総動員法、翌14年には国民徴用令が制定され、戦時体制が強化された。

こうした全体主義的国家体制が推し進められる中で、学校教育も軍国主義教育が一段と強まり、同年5月、天皇は「青少年学徒一賜ハリタル勅語」を下賜し、中学生らに戦時下の責任と自覚を求めた。

中学校では、出征兵士の送迎・戦勝祈願・詔書奉読・時局講演・勤労奉仕などが重要な学校行事となり、学校教練も内容が強化され、実戦に近い訓練を行うという、学校教育がそのまま軍事訓練の場になっていった。

土中でも、昭和16年10月には「進修報国隊」が結成され、防衛訓練の名の下に全生徒の軍隊化が進められた。

太平洋戦争が激化し、戦況が緊迫した情勢にあった昭和18年1月、「中学校令」が公布され、教育の目標を「皇国ノ道ニ則リテ高等普通教育又ハ実業教育ヲ施シ国民ノ錬成ヲ為ス」と定め、すべての学校生活をもって天皇制擁護のために奉仕・献身する国民の育成を目指した。

軍需工場への動員

戦局の悪化にともなって、軍隊への大動員が進み、国内での労働力不足が深刻化してきたので、昭和18年6月、「学徒戦時動員体制確立要綱」が制定された。これは「学徒ヲシテ有事即応ノ態勢ヲラシムルト共ニ之ヲ勤勞動員ヲ強化シテ学徒尽忠ノ至誠

ヲ傾ケ其ノ総力ヲ戦力増強ニ結集セシメン」とし、この中の「有事即応ノ態勢」とは、軍事能力の増強を図り、直接国土防衛に協力させることで、そのために体育訓練、戦技訓練、防空訓練の強化・徹底を図ることであった。もう一つの目標とされた「勤勞動員の強化」は、学生・生徒を戦力増強に直接必要な作業に、常時かつ集中的に動員できるようにしたものである。

あの手この手の戦意高揚策

戦況が日増しに悪化していく中、生徒達の愛国心を高め、国に殉じようとする精神を養うために、国家による思想や教育の統制がさらに強化された。

土浦中学校でも、天皇への絶対服従を説く「軍人勅諭」の暗唱、集会の場での奉誦が頻繁に行われた（昭和19年度、朝礼での勅諭奉誦は23回にも及ぶ）。

また、軍人を招聘しての講演会もしばしば催されている。

この頃、国民の戦意高揚のための映画が盛んに制作され、土中でもそうした映画鑑賞を、教師引率のもとに何度も実施している。

ところで、昭和18年5月、土浦中学校で藤田東湖祭が開催された。東湖は尊王思想の先駆者であり、水戸学の中心的人物だが、その東湖の胸像が中庭に建てられ、東湖を祭る式と彼についての講話が実施された。目的は皇国民意識の高揚を図ったものだが、本校独自の催しではなかった。「この像はコンクリート製で、青色に着色されていてブロンズ像そっくりであった。また、これは学校が自らの意志で作ったものではなく、県から支給されたものだった」と元本校教諭であつ

佐久良東雄歌碑
(善応寺境内)



た永山正先生は当時の様子を伝えている。この像は、終戦後進駐軍の追求を避けるため校庭に穴を掘り埋められたが、その後、いも畑になっていた校地を耕していた小使（用務員）さんによって偶然掘り出された。

また、昭和19年12月、佐久良東雄歌碑除幕式が行われた。東雄は、幕末期に皇国思想の普及に努めた国学者であり、万葉調歌人でもあった人物（八郷の生まれで、若い頃真鍋・善応寺の住職をしていた）で、彼の歌「すめらぎにうかへまつれとわれをこみしわがたらちねたふらかりける」の碑を作ることになった。その経緯については明らかでないが、先の永山先生によれば、「校内にはそのような動きはなかった。おそらく大政翼賛会土浦支部あたりからの働きかけを受けた学校が進修同窓会に諮り、決めたものと思われる」とのことであった。武井大助海軍主計中將（中3回）の揮毫になる東雄の歌碑は建設中の講堂玄関前に竣工した。これも、翌20年9月には、超国家主義思想の排除ということで土中に埋められたが、昭和28年に校庭から掘り出され、善応寺境内に再建された。東湖も東雄も、本校の激動の一時期に特異な形でかわった思想家として記憶に留めておきたい。

平成22年6月15日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会日本館活用委員会



子規の句碑のある愛宕山の公園
址からの眺望。(今ではビル群の
林立で霞ヶ浦はよく見えない)



前号で記した佐久良東雄の歌碑のある善応寺は、一高近くの真鍋坂下に
あります。旧水戸街道沿いのこの寺は、土浦城の鬼門除けとして藩主の厚い
保護を受けてきた名刹です。また、街道を挟んだ西側の台地突端には愛宕神
社の森が望めます。ここはかつて、桜の名所であり、霞ヶ浦を一望できる総
宜園という景勝地でした。水戸街道を旅した俳人正岡子規もここを訪れ、春
雨に烟る霞ヶ浦を詠んだ句を「水戸紀行」に残しています。今号では、一高
脇を通るかつての水戸街道に着目し、本校が誕生する少し前の土浦及びそ
の周辺の様子を、子規の「水戸紀行」をなぞりながら紹介します。

明治22年4月、正岡子規は一人の友人
を伴って、朝早く東京・本郷を旅立った。
この時、子規は二十二歳、水戸の親友、
菊池謙二郎を訪ねるのがこの旅の目的で
あった。土浦を経て水戸に至る鉄道（後
の常磐線）が開通するのは明治29年にな
ってからだから、当然徒歩によるもので
ある。

上野を経て千住に至り、松戸までは人
力車に乗る。車を降り、江戸川を渡った
松戸は現在のよう大きな町ではなかつ
た。『松戸驛より一里餘にして小金驛に至る。
道中の一條まちにて寂々寥々として』とある。
また、今の柏あたりで昼食を摂ろうとし
たが、淋しい所で、気の利いた飲食店も
ないと嘆いている。我孫子の宿屋の客呼
込みを振り切つて利根河畔に到達。

『始めて知りぬ、これ坂東太郎とあだ名を
取りたる利根川とは。標柱を見れば茨城縣と
千葉縣の境なり。川を渡れば取手とて今迄に
ては一番繁華なる町なり。』と江戸時代以来、
渡頭の宿場町として繁栄していた取手を
記している。

取手を後にし、『かくて過ぎ行く程に鶯を
聞きければ、・・・』

鶯の聲になまりはなかりけり
此のあたりは言語多少なまりて鼻にかかるな
り。』と鄙びた地の長閑な春の旅を楽しん
でいる。

『まだ日は高ければ牛久までは行かんと思
ひしに、我も八里（一里は約4km）の道に
くたびれて藤代の中程なる銚子屋に一宿す。
此驛には旅店二軒あるのみなりといへば其淋
しさも思ひ見るべし。』当時の藤代は、水戸
街道の宿駅ではあったものの人口五百人
余りの寒村であった。

翌日は朝から小雨が降っていたが、『春
雨のこと何程の事かあらんと』出立。『野道を

たどること一里、いと大なる沼あり、牛久と
いふ。〔中略〕沼は枯れ蘆、枯れ狐のたぐひ多
く水は深しも見えず、一艘の小舟の雨を侵
して釣を垂れぬるは哀れにも寒げに、水鳥は
かしこく、一むれ二むれつゝ動きもせず。』
と今の牛久沼とあまり変わらない景観を
綴っている。

牛久驛を過ぎた頃より雨脚は強まった
が、途中の茶店で一休みして、いよいよ
土浦へと向かう。荒川沖から土浦にかけ
ては、やや駄洒落調の文体で『すべる道草
ふみしめて、雨も嵐もあら川や、つきとなげ
きの中村を、さまよひたまふ御有様、あはれ
といふもおろかななり、かゝる苦にあひたまふ
ともいつかは花もさくら川、土浦まちへと著
きたまふ。』（太字化は筆者）そして『土浦の
町は街道の一すじ道にはあらず、少しはあち
らへ曲がりこちらへ曲がりして家数も可なり
ありげに見ゆ。』防御上、丁字型食い違い街
路をなす城下町特有の土浦の街並みをし
っかりと観察しているのはさすがである。

『丁度正午なれば書げしたむべき家もが
なと歩む程にふさはしき處見あたらず、・・・』



旧水戸街道宿場町の面影を残す現在の土浦・中城通り

近年、電線を埋設するなど、歴史の小径として
整備された。

子規は、道中での食事をかなり楽しみに

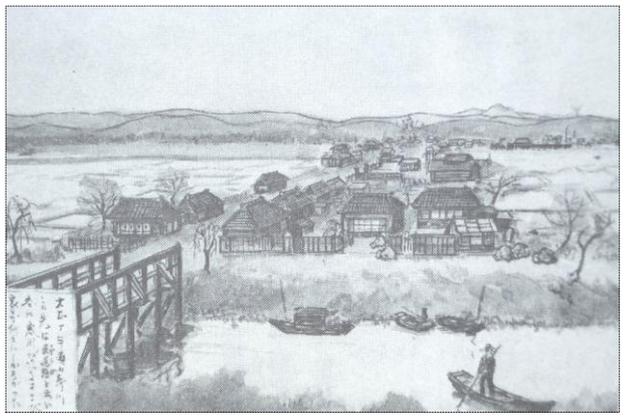
していたようである。風光明媚な地を訪
ね、趣のある茶屋などで名物料理を食し
たい。そんな子規の願望が、この紀行文
の随所から伝わってくる。それなのに、
旅初日から、まず、昼飯で苦労している。

我孫子宿まであと二里もあるという手賀
沼近くで昼時を迎えてしまった。やっと
見つけた食べ物屋で昼食にありついたが、
店がむさくるしい上、食事の不味くてろ
くに食べられず、近くににあった芋屋のふ
かし芋で凌いでいる。藤代の宿屋の晩飯
も『むさくろしき膳のさまながら晝飯にくら
べてはつまかりき。』と、いつてはいるもの
の、決して満足はしていない。それだけ
に、この街道随一の都市土浦（当時土浦の
人口は一人余り、隣接する真鍋を合合わせ
ると一万三千人余、二万五千人余の水戸に次ぐ
町）への期待は大きかったに違いない。と
ころが、この土浦でも思うような食事処
に有り付けないでいる。あちらこちらを
捜しまわり、挙句の果てには、怪しげな
曖昧屋に迷い込み、慌てて逃げ出す始末。
かなり疲れてはいたが、もう少し先まで
行つてみよう、と、車屋にかけあうが、『車
夫傲然として中々動かず、途方もなき高直な
ことをいひちらす故、さらばこれまでなり、』
と、子規は苛立ちを覚えながら土浦を後
にしている。

『余等が失望せしことは猶此等の外に一つ
あり、そを如何にといふに地圖を開きて土浦
は霞浦に臨むことを知る故、土浦へ行けば霞
浦は一目の中にあり、飯を食ふにも見晴らし
のよき家を選んなど思ひしは空想にて、來
てみれば霞浦はどこにも見えず』

子規は、想い描いてきた土浦ではない
ことに戸惑い、落胆している。

『土浦を出て一町ばかり行くと左側に絶壁に



土浦と真鍋の境界、新川より真鍋宿を望む（大正期ごろ）
「スケッチで綴るふるさと土浦」（佐賀進・中27回）より

は霞浦の見ゆるも知れずと石鏝數十級を上れば、數百坪もあるべき廣き平地にて處々に茶屋でもいふべき家あり、總巨園といふ額をかかげぬ。思ふに土浦の公園ならん。この断崖に立ちて南の方を見れば果して廣き湖あり向ひの岸などは雨にて見えず、されど霞浦とは問はでも知られたり。』

霞みながら春雨ふるや湖の上

相変わらず小雨模様様の天候ではあったが、子規の気分はやつと晴れたようだ。

この眺めのよい高台の公園は、戦前に国道建設工事で削られ、現在は愛宕神社境内の一部が残るのみである。ここに、かつて子規の句碑が建てられていたが、平成に入ったころ、何者かに持ち去られてしまい、句碑を紹介した案内板のみが雑草の中にあつた。

平成21年秋、何とか近代俳句の祖、子規の霞ヶ浦を詠んだ句とその足跡をこの所縁の地に残しておきたいと願う地元有志や子規句碑建立の会によって、土浦の街並みの先に湖を展望できる真延寺境内（愛宕神社の隣）に新たな句碑が再建された。土浦一高の目と鼻の先にある場所である。一度は訪れてみたい。

『水戸紀行』に戻ろう。

『二』を下りてまたいもを求め北に向て去りぬ。筑波へ行く道は左へ曲れと石のたちたるを見過して筑波へは行かず、草臥ながらも中貴、稻吉を経て感心にも石岡迄辿りつき萬屋に宿を定む。』

いも探しの謎はさておき、古い家並みが続く真鍋の坂を登りきると、水戸街道から筑波道への分岐点に至る。現在の本校旧正門前（勿論、本校はまだ存在しておらず、従つて正門も有ろう筈がない）であり、正門の反対側の辻に、道標が立っていた。「左きよたきつくば、右ふちう水戸」と刻まれている。きよたきとは、坂東二十六番札所の清滝観音で、ふちうとは石岡のことである。享保十七年（1732）に建てられたというから土浦では最も古い道標ということになる。



この石の道しるべも戦前の道路工事の際に撤去されてしまい、今はない。（現在、この道標は土浦市立博物館の前庭に移設されている）

子規はこの道標で水戸への道を確認、殆ど人家のない畑地の広がる真鍋台の松並木路を北上した。この十数年後、本校はこの地に産声をあげ、この松木立と共に時を経てきた。卒業生の多くは、校舎に寄り添って聳え立つ松の風景を、母校

の思い出の中に描いている。中26回の東郷正延氏（元東京外国語大教授）は「旧制土浦中学のおもいで」（進修百年）のなかで「私が寮生活を送っていた頃の陸前浜街道（水戸街道がこう呼ばれるようになったのは明治5年以降で、これは水戸街道、岩城相馬街道を総称したもの）は、両側に巨大な松の並木がはるか赤池といわれる方へ続いている。『昼なお暗し』といつてもそれほどオーバーではなかった。それが冬になり、コガラシが吹くようになると、ゴー・ゴーという怒濤の押し寄せるような音をかなでた。寮生活を思い出したに、あの松風のうたがなつかしく心よみがえってくる。』と述懐している。

昭和30年代中ごろまで、この松並木は旧水戸街道の風情を保っていたが、これも国道拡幅工事で伐採されてしまった。本校から北へ1kmほどの赤池から板谷にかけて、国道整備から取り残された旧道がある。ここに辛うじて松並木が生き延びている。日本橋から19番目（20番目という説もある）の一里塚も松並木とともに市指定史跡として保存されている。

『五日朝禱の中にて眼を開けば窓あからみて日影うらゝかにうつれり。昨日にはうつて變りし日和なれば旅心地いはんかたなくつれ

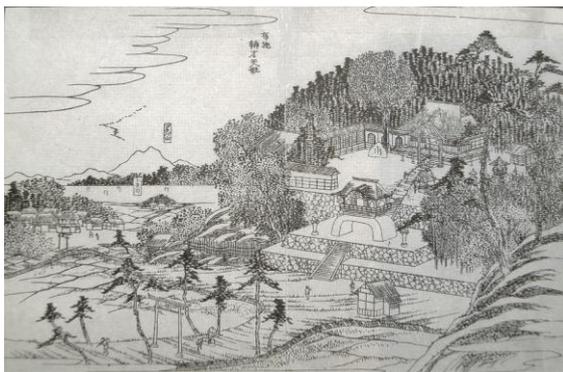


旧街道の面影を残す松並木
（土浦市若松町付近）

『五日朝禱の中にて眼を開けば窓あからみて日影うらゝかにうつれり。昨日にはうつて變りし日和なれば旅心地いはんかたなくつれ

し。』と好天のなか、子規らは、目的地水戸へと向つた。『筑波山は昨日のけしきに引きかへていとさやかに見られける。昨日より絶えず筑波を左にながめながら行くに、共に山も行く心地して離れさうになし。』

二日路は筑波にそふて日ぞ長き
あるは雲にかくれるあるは雲のあはひより男體女體のジャンギリ頭と嶋田髭見ゆる處など異なり。』



布施弁天図（赤松宗旦「利根川図志」より）
我孫子宿近く、弁天の森の彼方に白帆浮かぶ利根川や筑波山が描かれている。

常州路の単調な旅に筑波山の存在はきわめて大きい。道中のどこからでも見える独立峰は、距離と方角の目安となり、歩く程に変化する美しい山容は旅人の旅情を誘い、疲れを癒した。

こうして子規たちはこの日のうちに水戸にたどり着いたが、この水戸も、子規を十分満足させていない。そのあたりの状況については原文に譲りたい。

子規は、後に、この水戸への旅を振り返つて「水戸紀行は失望と落膽とを以て満ち」と述べている。何とも気の毒なことであつた。古い話とはいへ、茨城県人として誠に申し訳なく思う次第である。

平成22年7月10日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

第92回全校高校野球選手権大会茨城県大会は今日開幕します。これに参加する本校選手の健闘を願って止みません。手元に昭和27年の県大会のパンフレットがあります。参加校は35校です。勿論土浦一高も組合せ表にあります。それどころか準決勝で水戸一高を破り、準決勝まで駒を進め、惜しくも水戸工業に破れています。この時期、本校は県4強の常連校でした。甲子園に出場したのはそれから5年後のことです。

←明治39年頃の土中野球部選手たち(創立70周年記念誌「進修」より)



分校時代の野球部

本校野球部の創部は今から百十数年前の分校時代にまでさかのぼる。当時、生徒達に人気のあった野球は運動会でも欠かせない花形種目であった。『進修』創刊号(明治33年1月刊)には、明治31年6月(春季運動会)と11月(秋季運動会)に行われた校内野球試合の様子が詳細に記されている。

また、明治31年12月に組織された進修会の会則にも「本会は雑誌部・演説部・体育部の三部から構成され、体育部には撃剣柔道科と野球遊戯科の二科を置く」と明記されていることから、早くも野球部が存在していたことがわかる。

練習は神立原

授業を受ける教室にも事欠く不自由な学校生活を強いられていた分校時代であったが、野球部の活動は盛んであったようだ。「ふだんは、土浦尋常小学校の校庭を借りて練習をしていたが、日曜日ともなると、脚絆に地下足袋姿で、鉄道線路を辿って神立原まで出向き、練習試合などをした。」(『進修百年』平成9年11月刊)とあるし、また『進修』第二号(明治33年9月刊)には、「草青く地碧なる神立原、たんぼぼ乱るゝ頃も、千草の花の錦織りなす頃も、《中略》うつ球の強き思ひもて、鳥の啼かぬ日はあれど、ボール取らざることなく飛球の速きは、電の如く、打球の強きは、鉄も砕けむばかり」と神立原での熱の入った練習の様子が書かれている。

初の対外試合

『進修』第二号は更に「下妻野球選手よりの、挑戦状は来ぬ、時恰も、修学旅

行のあるを機とし、戦は十五日を以て開くべく」と続く。(修学旅行とは土中の教師をまじえた五〇余名の日光旅行)そして「枝静かならむと欲するも、風止まずとや、あゝ雨は降り来りぬ、されど横瀬審判官の一令の下に、戦は開かれ、吾先づ攻軍たるも、如何せむ、雨はふりに降りしきり、球は濡れて手にも止らず、足はすべりて地につかず、空しく涙をのみて、靈腕施すに由なき時の、口惜さは如何はかりぞや」と下妻リードで展開したが、雨のため三回で中止となった試合の顛末を記している。

この対抗試合について、明治36年版の『野球年報』に、下妻中からの投稿記事が記載されている。「好敵手を待ちし折柄、県下土浦中学より挑戦あり、時は明治三十二年十月廿有余日」と土浦中より試合を申し込まれたとし、両校の雨中戦の経過を次のように述べている。

「当校選手の初陣たる対土浦中学試合は当校に於て催され、《中略》攻守手幾度か交代しつゝ一刻一刻戦いは猛烈を加えんとせし折りしも、朝来の雨雲いや垂れて終に雨滴を飛ばし、雨中の戦況壮烈云わん方なし。何れも責任を負う健児の雨もものかと叫びつゝ死に物狂いに戦いしが、猛雨沛然として風さえ烈しく、戦は終に中止せられたり。勇士の痛恨思つに余りあり。」

また、後年、飛田穂洲も「このチーム(下妻中)の最初の対抗試合は明治三十二年十月、土浦中学の挑戦に応じて自校庭に戦ったのである。この時土浦軍は草鞋脚絆の旅装を整えバット・ミットを肩に筑波山を廻り数里を踏破して下妻に乗込んだ。《中略》不幸三回にして大雨のた

下妻中学校は、明治30年4月、茨城県尋常中学校の分校として、土浦分校と共に設立された。当初は下妻町本宿の新福寺を仮校舎としていたが、明治32年4月には雨天体操場、同年9月には新校舎が完成している。また、生徒達の手も借りて運動場も整備された。(土浦分校の新校舎が完成するのは明治32年12月で、運動場の土盛り工事が済むのは明治34年になってからである)



完成当時の下妻分校新校舎(明治32.9.6)
土浦分校の立田校舎もこのような建物であった。

め中止となった。スコアは下妻の十三、土浦の一で土浦軍の旗色は極めてよくなかった。(『野球人国記』)と書いている。ともあれ、本校にとって最初の対外試合は雨天中止とはいえ三回までのコールドゲームの惨敗であった。

果し状はどちらからっ?

ここで、興味深いのは、この試合を巡っての両校の記録に微妙な違いがあることです。

まず一つは、試合の申し込み(挑戦状)はどちらからなのか、という点です。双方、挑戦を受けたとしています。第三者である飛田穂洲が『野球人国記』に土浦中学の挑戦に応じた試合と記しているが、文面から下妻の資料に基づいて書かれており、疑問を解くに足らない。

このことについて、今となってはもはや解明の術はないが、どうも土中側からの申し入れではないかと思えてならない。下妻からの挑戦を、事前から計画されていた日光への修学旅行途中に受けるというのは不自然だ。むしろ土中側から試合を申し入れ、対抗試合を旅行の日程に組み込んだと見た方が無理がない。この試合に本校が勝利していれば、そうした記録が残されたい。挑戦状を突きつけて臨んだ結果の大敗では何とも格好がつかないからである。

もう一つは、下妻が、「回数前後三回、彼得る所一、我は十三点を得たり。」とスコアを記しているのに対して、『進修』の記録にはそれが無い。雨のため捕球がままならず、ぬかるみのグラウンドに足をとられて思うようなプレーが出来なかったと嘆き、『幾夜の夢に入りけむ』この戦も遂に画餅となりぬ、されど当日三回迄の有様は、いはましけれど、吾にこを記すへき筆なきを如何せむ」と試合の勝敗については明記していない。

勝負は勝つか負けるかの極めて単純明快な結果の世界である。しかし、勝者と敗者では、その結果の受け止め方に大きな違いが生じてしまう。その勝負は時間を経た後世における評価すら異なったものにしてしまうことがあり得る。

『下妻第一高等学校野球部史・中学時代

篇』(平成15年刊)で「この試合は、県内で県内の学校どつしがおこなった最初のものとして記念すべきものである。」とその意義を評価しているが、『土浦中学校野球の記録』(平成13年刊)では「土浦中学にとって記念すべき試合が行われた。」とあるだけで記述は素気ない。両校の歴史認識の違いといえ少々大げさなもの言いかもしれないが…。

因縁の対決

明治33年4月に、土浦・下妻両分校はそれぞれ土浦中学校・下妻中学校として独立するが、下妻中は一高(現東大)選手のコーチを受けたり、当時連戦連勝不敗を誇っていた水戸中に挑戦して勝利(明治34年10月)するなどますます野球熱は高まっていた。本校でも立田校舎の運動場で練習ができるようになり、竜ヶ崎分校との練習試合も頻繁に行われていた。勿論運動会での学年対抗試合や校内紅白戦(各級連合野球試合)は「快晴微風だにない、のどかな春の日に、見物に来る者百数十人。」『進修』第五号)とあるように大変な人気であった。

また、同号には、明治36年7月に行われた「土浦対下妻四年以下野球試合」の詳細な試合内容が記録されている。そして大差を以って土浦が勝ったことを次のように大げさに報じている。

「勝利！勝利！勝利！我校はじまつての大勝利！即ち三十一に對する彼れオソリイ。」また、「敵の打球外野に飛びしものなく一般に外野諸氏は暇なりしは御気の毒なり」といささか調子に乗った記述である。

同年10月に再び対下妻戦が行われて

いる。この試合を飛田穂洲は「明治三三年下妻に遠征して不覚をとつてから彼等は、二年に亘る練習を積み再度下妻征討の軍を起し、例の如く草鞋脚絆に身をかためて筑波山を廻り下り下妻城下に押し寄せた。三六年一〇月四日筑波の峰は漸く色づかんとするころであった。試合の前半土浦軍の形勢甚だ悪くまたしても下妻軍の下風に立つかと思われたが、後半に入りて大いに揮い十対六をもって見事これを蹴破(後略)」と先の『野球人国記』で述べている。この戦いの様子は『進修』第五号でも「戦勝記」として「亀城壁下の九名士臥薪嘗胆の練習はそも誰が為ぞや。勝つも負くるも一場の夢という事勿れ勝てば官軍負くれば之れ賊九士の勝負は亀城五百の名栄存亡の関するあるを。」と名文調で綴っている。

県中等野球大会始まる

「この年(明治37)土浦中学の呼びかけで第一回の中等野球大会が開催された。飛田穂洲によると『六月下旬土浦中学より県下大会を開催し大いに県内の士気を鼓舞しようといふ勧誘状が舞い込んだ。無論水戸中学は無条件で賛意を表し、期日は八月一日、土浦在神立原を会場に定め、土浦中学は主催校として万事に幹旋することになった。これが茨城県下大会の嚆矢である。土浦は水戸をはじめ下妻、竜ヶ崎、太田、水海道に勧誘状を発送したが、この時参加したのは、僅かに土浦、水戸、竜ヶ崎の三校に過ぎなかつた』(『野球人国記』。大会の四年後、穂洲は『いはらき新聞』(明治40・7・30)に、『第一回県下の大会は四年前、該校が發起して神立原に開催したのが初めてで、

今日の如き立派なものになったのであるから、大会に於ては土浦中学が最大の恩人とも云つべきである。』(以下略)と書いている。

この大会は「連合野球大会」といわれている。本校の不参加の理由については不明だが、明治34年の対水戸中戦で、学校の不許可にもかかわらず、応援団の強行遠征事件が尾をひいて、学校当局の許可がえられなかつた公算が大きい」『下妻一高野球部史・中学時代篇』。

今から百年余り前に、現在の全国高校野球選手権茨城大会の原点ともいえるこの県大会の開催を提唱し実現させて、県球界から高く評価された本校野球部だが、このことを伝える本校内の資料は乏しい。『進修』第六号(明治38年4月刊)に、年度、開催地も記されていない「土浦対水戸野球試合」と「土浦対龍ヶ崎野球試合」の記録があるのみである。

水戸戦については、「水戸中学勝利の万歳を叫びたりき、諸君よ！ 記せよ！ 七月二十八日、オソリー一点の差を以つて、亀城の健児をして敗奴の名をとらせたるを！」とその悔しさを述べ、続く龍ヶ崎戦については「七月二十日、此日の戦ひはもの、美事に、敵軍を打ち破りたるを！ 吾が得点十一、敵の得点オソリー、：龍軍の士は悄然として去り、吾軍の士は昂然として去る、野はやがて夢の如く暮れたる也」と勝利を喜ぶなど、試合の勝敗に一喜一憂しているだけで、連合大会の意義にまで言及していないのが惜しまれる。

ともあれ、今年も暑い夏が始まる。僅か三校で始まった連合大会を顧みるに、一〇三校参加の球宴は殊更興味深い。

平成22年9月7日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会日本館活用委員会



『進修』第35号(1932年刊)のカットより

連日記録的な猛暑が続いたこの夏、皆さんの夏休みは如何でしたか。まさに暑さとの闘いの毎日であったと思います。かつての日本の夏はこれ程暑くなかったような気がします。ここで、校友誌『進修』に綴られていた生徒の作文の中から、土中生の夏休みの様子を窺ってみたいと思います。『進修』第4号(明治36年刊)に掲載された当時2年生の「消夏日記」の題で書かれた鎌倉地方への紀行文を引用してみました。それは、今の一高生にとっては想像もできない世界の話かも知れません。遠い昔となった明治の土中生像の一端を垣間見ることができれば幸いです。

僅かな草鞋銭で、いざ鎌倉へ

「日頃待ちこがれたる暑中休暇とはなりぬ、されどこの長き月日をたゞ徒らに打過さんもいと口惜しければ、余は親しき友の笹本氏と共に無銭旅行をば企てにき、(中略)わづかに草鞋銭のみを持ちて横須賀・鎌倉地方を跋涉せむものと、七月二十二日の朝まだき土浦を出発し、八月六日の日暮る頃、つゝがなく歸宅するを得たり、今その一節を記さん」という書き出しで始まり、七月二十八日には、午前中、高德寺の大仏を見、七里ヶ浜で海水浴をしてから腰越を経て片瀬に至り、龍口寺に詣で、更に江の島の市杵島姫を祭る宮を参拝して、「此所の名産なる、サビイのツボヤキを食ひ、又ひるげをすすましぬ」と一休み後、横穴の辨天を拝し、洞穴を見学、「この穴は富士の抜穴に続いている」という案内人の説明に「案内者の法螺は、この洞穴よりも大なりけり」などと少年らしい茶目っ気も見せている。

江の島を後にし、腰越の満福寺、鎌倉の極楽寺に詣でた後、壽福寺にも足を運び、さらに「亀ヶ谷を過ぎて建長寺に至り、詣でんとすれば、早や扉を閉ちて見えすなりぬ、されば宿せんものと、此所の警察署長の家に至りしに、民家に非ざれば、泊むる事得ず」とはらる、其言葉のあらあらしく、且無情なる、其職を省みなば、實に恥づべき事にこそ、此度は町長を尋ねんと思ひしに、こは戸塚より通勤することなれば、そこまで行くべくもあらず、助役の家いとゆたかに見えければ、之に赴き一泊を乞ひしに、氏云ふやう、安き宿屋を案内するは出来得れど、泊むることはかなはずと、依て大に途方にくれしが、勇ましき海国男子、いかでか之に屈すべき、さはいへ、空腹には耐へ兼ねしかば、飯打ち食ひて此度は師範学校教授、川口先生

の家に至りて、一泊を乞ひしに、氏は極めて深切なる人にして、心地よく話されしかば、これに一夜の夢を結びぬ」

七月二十九日、七時宿を辞し、建長寺を参り、鶴岡八幡宮を訪れて、ここに所蔵されている数々の宝物を見学した後、頼朝の墓を詣で、さらに官幣中社鎌倉の宮を拝している。「これにて鎌倉はほゞ見盡しゝかば、此度は横須賀に行かんものと、金沢に回心…」

横須賀では、軍港に停泊している戦艦の壮麗さに感嘆し、「午後海軍機関練習所を一覧し、それより市内を散歩せしが、水兵の往来いとしげくて、なかなか賑かなりき」と旺盛な好奇心を満たした。この日は友人笹本氏の親戚前原氏宅に泊まっている。

七月三十日は、前原氏に依頼された水兵の案内で造船所を見学、「其装置の巨大なる、其職工の巧みなる、いかでか驚かぬ人のあるべき…」と幾多の工場群の広大さに感嘆している。午後は軍艦を案内してもらい、その巨大さを「筆舌の尽くす所にあらず」と記している。

この後、安針の墓などを訪れてから「金沢に達せしかば、此所に泊らんものと、小学校長を尋ねしに、不在なればとて断らる、さらば村長の家にて行きたりしに、こも横浜に来れりて泊るを得ず」

次に金沢文庫のある称明寺に申し入れるも「避暑の来賓多くして家塞がりたれば、他に行かれよ」と僧の門前払いに遭う。仕方なく一里半の山道を越えて富岡に赴き、「又も小学校長を尋ねしに、此先生様々のいひぬけのみして、泊めざりしかば、…」という有様であった。困った挙句、駐在所の巡査に窮状を訴えた。親切な巡査は夕飯を馳走した後、「余が家は狭くして寝るを得ず」として、旅館「金波楼」を一人十銭の

格安料金で泊まれるよう掛け合つてくれた。当人たちは「此所第一の宿に投ずるを得たり、げに可笑しきことこそ」と呑気な文で鎌倉紀行部分の作文を結んでいる。

今でも「無銭旅行」は死語にはなっていない。若者たちのヒッチハイクや寝袋持参のツーリングは盛んだ。それにしても、明治期の中学生の無銭旅行は想像を超えるものがある。紹介状もなしに民家に宿泊を求めるところを当然のこととしている。突然の見知らぬ訪問者に宿泊を申し込まれた相手は、大いに困惑したに違いない。鎌倉の警察署長さんはおそらく官舎住まいであったようである。「民家に非ざれば…」と断つたのだが、その言動を含めて「實に恥づべき事」とされてしまった。

学生のターゲットになったのは地元の名士であったようだが、迷惑なことに変わりはない。町長さんも小学校長さんも口実を設けて断っている。

当時、中学生も含めて学生は一握りのエリートであった。川端康成の「伊豆の踊子」に登場する一高生にその典型を見ることが出来る。しかし、帝大生や高校生(旧制)はともかく、中学生となると、都会と地方ではその評価には差異があったのではなからうか。

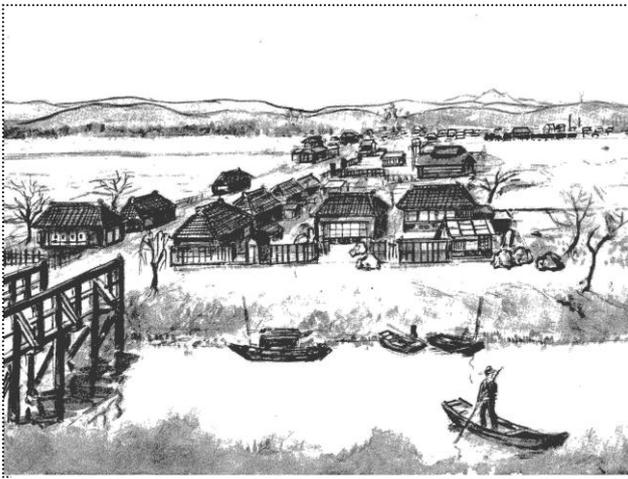
まだ、ごく一部の子弟しか進学できなかった地方の中学生と先進的な京浜地方に連なる鎌倉あたりに住む人々との意識のずれが文中に見え隠れしている。

しかし、一方では中学生でありながら、実に旺盛な探究心をもって名所旧跡、神社仏閣を尋ね、ここでは省略したが、鋭い観察力を駆使した見聞録を記している。こうした先輩達のDNAは、良くも悪しくも何らかの形で現在の本校生に受け継がれているようにも思われるのだが…。

平成22年10月12日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会日本館活用委員会

← ナガトロ (長道路)

今年7月、本校の校歌が縁で交流がある静岡県・磐田南高の同窓会長さんらが来校されました。その折、本校の概略を紹介するパンフレットの出身中学校別生徒数を見て、その中学校数の多さに驚いておられた。5名以上在籍している中学校だけでも50校に及び、全在校生の出身中学校を総計すると110校を超えている。確かに本校の通学範囲はかなり広い。それだけに遠距離通学に苦勞されている生徒さんも多いかと思ひます。



中27回 佐賀 進氏 「スケッチで綴るふるさと土浦」より

明治期の通学

『進修百年』の第二編第一章に「真鍋台の青春」として、卒業生たちの土中(一高)時代の思い出が収録されている。そこには、恩師との出会いや級友との交流、遠足や運動会など多様な記憶が記されている。その中で比較的多く語られているのが通学に関するものだ。特に土中時代(戦前)にそれが多い。

「私が水戸中学土浦分校へ入学したのは、明治三十二年四月、即ち十九世紀最後の年である。その頃中学といえは茨城県には、水戸中学と三年生までの分校が土浦と下妻にあっただけであった。」と述べているのは風見章氏(中3回、元近衛内閣 司法大臣)で、水海道の自宅からは通うことが出来ず、一ヶ月三円の宿屋に下宿している。翌年、水海道と下妻の間に乗合馬車が行くことになり、「まだ自転車はなかった時代だから、あるく外は、人力車だけが旅行者の利用し得る唯一の交通機関であった。…乗合馬車が出来たので、往復も大変便利になったと云うもので、その年私は下妻中学へ転校することになった。」と分校当時の交通事情と中学への通学の大変さを述懐している。

真鍋台へのナガトロ

大正二年に入学した中西秀男氏(中17回・元早大教授)は「県内に中学校がいくつあったか、正確には知らないが、まず五校か六校ぐらいだろう。だから自宅の遠い生徒もかなりあった。その上、交通機関は常磐線の汽車と土浦・北条間の乗合馬車、それに霞ヶ浦を麻生あたりまで通う蒸気船があるだけで、バスなどはもちろんないから、自宅が遠すぎる者は学校の構内にある寄宿舎に入った。親戚知人のところへ住み込んだりした。

自転車通学もかなり多かったが、石岡町からだと片道一時間かかった。…汽車その他の交通機関を使って通学することはなかったと思う。便利に使えるほど何本も出ていなかった。」と当時の土中生の通学状況を述べているが、当の中西氏は市内の自宅から徒歩で通学している。氏は別稿で「大正七年三月に卒業するまで本町から真鍋台まで通学した。中町・田町・横町と通り抜けて北門へ出ると、そこで家並みがバツタリ途切れて、三百メートルばかり向こうの真鍋まで、右も左も広い田んぼだった。はるか右手には常磐線の線路が見えるし、左手には遠く小田山が見え、筑波山が見える。その田んぼの中の一本道をナガトロまたはナガト一口といった。長道路の訛りかも知れない。…ここを経て真鍋台の森から頭を出している母校の尖塔を見ながら…」と登校している。このナガトロに関しては佐賀進氏(中27回・元佐賀医院院長)も「当時の住まいは内西町、土浦小学校の側でした。学校へは今の裁判所近くの搦手橋を渡り、現在の関東銀行の脇を抜けて横町へ出て、新川を渡ります。そこから先が長道路(長免路)で真鍋の宿まで井原石屋・桜井鉛屋・石塚写真店くらいしか家がなく、筑波山がよく見えました。そのため風がよく通り、冬はとても寒く、西風の吹く日などは耳が痛くちぎれそうでした。」と書いています。

文字どおりの登校—真鍋坂

今でも古い店蔵などが残る真鍋は土浦とは完全に独立した町並を形成しており、結構繁盛していた。先の佐賀氏は「遠くから来る者には自転車通学が許可されていませんでしたが、自転車の校内乗り入れは禁止されてきました。それで、この真鍋の坂付近のお店で自転車を預かってくれました。坂の近くに



真鍋坂下(中27回 佐賀 進氏 画)
この界隈に下宿屋も多くあった

は下宿屋もありました。中学生だけではなく、土浦高女の女学生も下宿していました。…筑波線の真鍋駅に近づくと筑波線で通学してくる大勢の女学生がやってきます。」と続けて書いています。「真鍋へ入って長道路(ながとろ)を筑波線の踏切に向かう。踏切を渡って真鍋の街並みを過ぎるといよいよ心臓破りの坂にさしかかる。この坂の上り口が、営業を始めたばかりの市内バスの終点で、五銭あればこのバスで駅(土浦)まで行けるのである。とにかくこの坂はきつかった。あまり丈夫でなかった私にとっては、校門にたどりつく前の難関であった。文字通りの登校であった。」と述べているのは、やはり市内の土浦駅近くから徒歩通学をしていた小林元光氏(中30回)である。

楽ではなかった汽車通学

大正から昭和にかけて交通状況もかなり良くなり、常磐線や筑波線を利用した

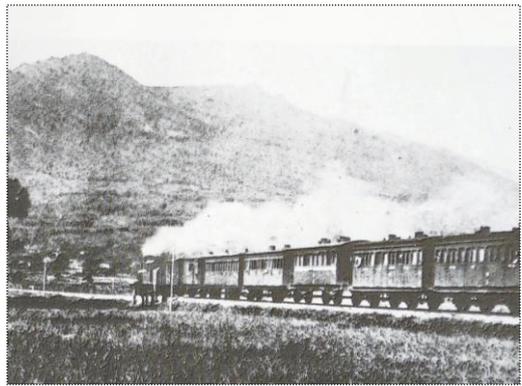
通学も一般的になってきた。当時の汽車通学の様子を殿塚増雄氏（中25回）は次のように伝えている。「常磐線での汽車通学が可能になったのは、大正の末期だったと思う。それまでは通学に便利な時刻表ではなかったし、また一日上り下り各、わずか六、七本だった。だから、寄宿舎に入るか、土浦、真鍋に下宿生活を余儀なくされた。しかし、大正末期に通学可能となったとはいえず、とにかく本数が倍増して、登下校に至極好都合となったわけではない。登校後、始業までなお三、四〇分待たねばならなかったり、放課後も折りよい汽車などなく、二時間近くも待たねばならぬ不便もあったことを覚えている。そのうえ土浦駅から真鍋の坂を上がって学校まで、街の中をテクテク歩いて約三〇分もかかった。」

明治28年に土浦一友部間が、29年に土浦一田端間が開通した常磐線（当初は海岸線と称した）市川 彰氏（元本校教諭）著書より



また、筑波線を利用して通学した大津国三氏（中30回）は「昭和初期の筑波線は…また運転回数が極めて少なく、都合のよい列車がなくて、学校に着いてから授業が始まるまで一時間以上もあった。下校になると、汽車に間に合わせるため、大急ぎであの真鍋坂をかけおろるのが常であった。何しろ乗り

はくると二時間も待たねばならないので…」というように汽車通学も決して楽なものではなかった。



筑波山麓を走る筑波鉄道の列車 ↑
大正7年に土浦一岩瀬間が開通した市川 彰氏（元本校教諭）著書より

泥だらけの青春

昭和の初め頃になると、自転車通学者が多くなってきた。学校まで10km前後を徒歩で通う生徒はかなりの筈だ。こうした遠距離徒歩通学者にとって、自転車という交通手段の登場は画期的なものであったに違いない。しかし、その実態は必ずしも快適なものではなかったようである。最後に「真鍋台の青春」に寄せられた前島福松氏（中30回）の「泥んこの自転車通学」を紹介したい。その一部分を引用しようとしたが、止めた。小気味のいいフレーズが連なる文章をコマ切れなどに出来ない。初めの部分だけ省いてほぼ全文を掲げることにした。

「当時私の自宅は、今の千代田村（現かすみがうら市）雪入の山麓にあり、学校まで約十二kmあって、通学も容易でなかったが、私の兄は五年間を徒歩で通学し通じたのだから

大したものである。私など初めから自転車通学だったのだから、兄の時代に比較すれば随分楽だったわけであるが、それでも容易ではなかった。というのは当時の道路状況が非常に悪く、今とは比較にならない悪路であった。自宅から学校までの距離のうち、三分の二に当たる八kmは砂利も敷かれていない道路であった。一雨降ればたちまち泥んこのぬかるみと化し、自転車など受け付けないような、後に述べる霜解け道と大差のない有様になってしまふ。

それでも四月から十月までの間はまだよかった。雨の降らない限り、普通に走れたからであるが、十一月から三月まで、特に十二月、

一月、二月の三ヶ月はひどかった。朝霜が降りるか、薄氷がはる。太陽が昇ってくるにつれ、霜がとけ始める。そうなるが大変だ。道路は徐々に泥土化してくる。その泥土が車輪につき始める。五十mも走らないうちに、つきだした泥土が、タイヤと泥よけとの間に詰まって、自転車は動かなくなる。このことは経験した者でないとわからないだろうが、自転車から降りて、車輪のタイヤと泥よけとの間に詰まった泥土を取り除きにかかる。この作業がまたなかなかの難作業である。篠や竹へらでけすり落とすのだが、とても一回ではだめだ。何回か同じことを繰り返しているうちに、車輪の泥土がスポンに着いてくる。スポンだけのうちはまだよい。随分注意している心算でもいつの間にか上着のあちこちにも泥がつく。繰り返しているうちに、上から下まで泥まみれになってしまふことも年に何回かはあった。

さて掃除し終わったところで、また同じことを繰り返すのは嫌だから、エイ面倒とはかり、自転車を肩にかついで歩きます。何のこ

とはない。人が自転車に乗るのではなく、自転車が人に乗っている奇妙な姿である。下の人は泥まみれで半ペソをかき、寒いのに汗をたらたら流している。

自転車をかついで歩けるのはせいせい五十m位で、肩は痛くなり、足はぶらぶらついてくる。一休みしてまたかついで歩きます。五十m位でまた一休み。こんなことを繰り返しても、やっと三百m位が限界で、つい自転車に乗ってしまふ。するとまた同じことになる。時間はどんどん経ってゆくし、疲労でふらふらになる。だが、家を出たからにはどうしても学校に行かねばならぬ。

そうこうしているうちに国道に出る。今のよう舗装はされてなかったが、砂利道であり、泥土に悩まされることはない。国道に出るともう授業開始まで間がないので、夢中でペダルをふんで、汗だくになって、やっと学校の門に達する。丁度その時、朝礼を知らせる鐘がきこえてくる。自転車置き場に自転車を置いて、駆け足で教室に入る。先生が出欠をとっている。慌てて自分の席につく。泥まみれの姿のまま。こうして私の五年間は過ぎていったのである。」

激しい泥土との格闘の果て、たどろついた教室で息を整え、授業に立ち向かっていったひたむきさが伝わってくる。通学という手段でしかない行為であっても、かかる困難さを五年間貫き通したこと自体大いなる意味と価値を有するものである。改めて敬意を表したい。

今号では、『進修百年』の第二編「真鍋台の青春」から土中時代の通学の様子を、先輩たちの「思い出の記」の引用文で紹介した。詳しくは『進修百年』を一読されたい。

平成22年11月16日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



左は昭和25年の新入生1年G組の集合写真です。全員、新制中学校から進学したはじめての土浦一高生です。戦後まだ間もない頃で服装などまちまちです。写真をよくご覧ください。前列中央の担任（中田左内先生）の両側に女生徒が写っています。この年、本校に、はじめて6名の女子が入学したのです。これは本校にとって画期的なことでした。

旧制中学から新制高校へ

戦後の昭和22年当時、茨城県には県立中等学校として中学校九（水戸・土浦・下妻・鉾田・麻生など）、高等女学校一八（水戸・土浦・下館・石岡・大子など）、農学校一二（水戸・石岡・真壁・笠間・取手など）、工業学校四（水戸・下館など）、商業学校二（水戸・湊）、水産学校一（湊）の計四六校で、その他に市町村立と私立の中等学校が数校ずつあった。昭和23年4月に発足した、新制高等学校は民主主義教育の原則に則って、学校差の撤廃や入学試験の緩和、勤労青年への門戸解放等によって、高等教育の機会均等を実現させようとするものであった。男女共学の実施も、新制高校の大きな特色であったが、制度として定着するにはかなりの時間を要した。

『茨城県教育史』（茨城県教育会・昭和35年刊）には「この問題に關しても、新制高等学校再編成協議会において慎重な審議が行われた結果、昭和二十四年度の新入生から実施することにし、原則としては、男女共学を本体とするも、施設その他地域の事情により、画一般に実施することをされた。」と述べられているように、最初から消極的な姿勢がみてとれる。同書は続けて「新制高等学校の発足した昭和二十三年度においては、普通課程においては次のような状況であった。

男子のみの学校…二六校
女子のみの学校…一九校
男女共学の学校…四校

しかしながら、当時は従来の男子に対しての中学校、女子に対しての高等女学校という観念が強く、男女共学に対しては、従来の男女性別に対する儒教的思想が強く支配していたので、相当社会の注目するところとなった。男女共学を原則として生徒募集を行ったものの、実情はおのずから二つの方向に分れてくるようになった。一つは同一地域に既に旧

制の中学校と高等女学校とがあって、男女別の教育が行われていたところにあつては、従来の伝統から男女の共学は一般に不振であった。これに対し、同一地域に唯一の旧制中学校をもっていたところでは、男女共学が成功を見るようになってきたのである。例えば全学年にわたって男女共学が行われた新制高等学校は小瀬・笠間・麻生・潮来・江戸崎・真壁・谷田部等であった。日立・太田・水戸・土浦・下館・下妻・水海道・電ヶ崎・鉾田等の如く旧制の中学校が第一、旧制の高等女学校が第二の高等学校に再編成されたところにあつては、大部分男女別に分け、極めて少数の男子または女子が一方に在学している現象である。」と、新制高校への移行期数年間の推移を分析している。

初の女子一高生は六人

昭和25年、本校創立以来初めて女子六名（のち一名転入で七名になる）が入学した。これまで女人禁制であった教室に可憐な女生徒がいるということ自体、女子から隔離されて学校生活をしてきた当時の上級生たちにとっては俄かに信じ難い出来事であったに違いない。休み時間、女生徒のいる教室の廊下には見物の上級生が群がったほどである。

翌26年には三十二名の女子が大挙して一高に入学した。学校側はその対応に苦慮した。五、六名ならともかく、三十人を超えるとトイレや更衣室など女生徒の環境を整備しなければならなくなった。体育などの授業も女子を視野に入れたカリキュラムに改めなければならぬ。これまで男子ばかりを相手にしてきた教師にとって、女子の指導に戸惑いもあった。こうしたことから本校では、やっぱり男女共学は無理だという気運が強まり、一転して女子の一高への志願を抑える方向に動きだした。昭和27年に入学した岩崎（小野）惇子氏（高7回）は『進修百年』に「パイオ

ニア時代の女子学生たち」と題して一高への入学について次のように記している。「土浦市内一のマンモス校、土浦一中からは七人ほど一高進学希望の女子がいた。しかし受験票提出の期限ぎりぎりまで、高校の意図をうけて教師が一人一人説得することにいった。それも生徒指導に熱心な教師ほど一生懸命、親も呼んで進学校の変更をすすめた。私の場合も例外ではなかったが、変更するにも行きたい高校がないので、そのまま受験した。」こうした一高の方針はしばらく続けられたようで、このあとしばらくの間、女生徒は数人程度に止まっている。

水戸一高では二人

水戸一高でも同様な状況がみられた。昭和25年4月、初の女生徒二名が入学した。このことは地元新聞にも報じられるなど大きな反響を呼んだ。「水戸一高百年史」（昭和53年刊）には「しかし、大騒ぎされるほどの気負った気持ちには二人にはなかつた。一人は当時を回顧して、『私は水戸の学区内にいましたから、水戸市内の高校を受けるつもりでいたところ、中学の先生が、水戸一高へ行け、とおっしゃるので入ったわけです。女生徒が一人もいない学校であるとは全く知りませんでした。前もって分かっていたら受験しなかつたかもしれません。だから入学式の時に二人だけと知った時は相当のショックでした』と入学の動機を語っている。女生徒に対する校内の反響は大きかった。すでに二人の入学以前、その報に接した生徒数名が、教師のもとへ陳情に行き、七〇年の伝統の名においてその入学に反対するといふ一幕もあった。…」と当時の様子を記している。

ともあれ水戸一高でも男女共学がスタートし、次年度には十三名、三年目の27年度には二十名の女子が入学するようになった。しかし、昭和30年代前半には一ケタに減少するなど、共学への歩みは一進一退の状態が続いた。

表1 水戸一高・土浦一高の年度別女子入学者数（昭和25～40年度）

年度	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40
水戸一	2	13	20	9	10	12	9	3	7	2	8	14	22	25	36	36
土浦一	6	32	10	6	4	6	4	17	13	22	12	27	32	39	34	42

「水戸一高百年史」、土浦一高・学校要覧より作成

表2 土浦一高の女子入学者数の推移

年度	昭25	30	35	40	45	50	55	60	平2	7	12	17	22
女子入学者数	6	6	12	42	57	68	83	104	128	138	139	117	114
入学者総数	350	371	373	445	361	360	404	423	425	381	365	327	325
女子割合(%)	1.7	1.6	3.2	9.4	15.8	18.9	20.5	24.6	30.1	36.2	38.1	35.8	35.1

土浦一高・学校要覧より作成

再び本校に話を戻そう。表1に示したように水戸一も土浦一も女子が全体の割合を占めるまでには制度発足後十数年を要しているが日本の高度経済成長に合わせるように、昭和40年代になると、年々五十人を超える女子が入学するようになり(表2)、土浦一高はもはや男子の牙城ではなくなった。数の上だけでなく、学校生活の各分野で女子の活動が目覚ましくなった。生徒会で活躍した高15回の中村三喜氏は『進修百年』への寄稿「伝統と創造」のなかで「男女生徒が一緒にフォークダンスをするには抵抗がかなりあった時であるが、むしろ女生徒からの強い働きかけで実現したと記憶し

年々華やぐ土浦一高

先の『水戸一高百年史』で「本校で一定数の女生徒が在籍し、曲りなりにも男女共学と呼べる状態に達するには、十年余の歳月を要したのである。」と述べている。さらに同書では「本県当局は、発足当初から男女共学には必ずしも積極的姿勢を見せなかった。二七年二月の地元紙一面トップに「男女共学制度好ましからず、県下では全面的廃止の公算大、西野教育長突如声明を発す」と四段抜き見出しの記事が掲載され、読者を驚かせたことがあった。」と県教育委員会の共学否定の方向性を指摘している。ちなみに、男女共学を実施して数年を経過した昭和29年度の入学志願者の状況を、『茨城県教育史』の資料から拾い出してみよう。まず女子の一高系への志願者数は、日立一4、太田一2、水戸一9、鉾田一46、土浦一5、竜ヶ崎一16、下館一9、下妻一16、水海道一27、などで結構ばらつきがみられる。一方、日立二、太田二、水戸二、土浦二、竜ヶ崎二、下館二、水海道二など二高系への男子志願者は皆無であるが、石岡二10、取手二42、結城二13、古河二14のように一部共学校も出てきている。

ている。」と女生徒の積極性を述べている。音楽部や演劇部など文化クラブはもとより、テニス部やバレエ部など運動部にも女子が進出するようになった。昭和45年に入学した橋本(柴沼)順子氏(高25回)は女子五人以上を集めて一高に女子バスケット部を創設してい



少数精鋭時代の女子剣道部(昭和58年)

女生徒の活躍が目立つ文化祭



フォークダンス(高21回) 昭和43年

るし、同じく高25回の佐久間(吉田)満里子氏は弓道部での活動を「一年の秋の県南新人戦には初めて結成したチームにもかかわらず、団体・個人ともに入賞することができた。」との一文を『進修百年』に寄せている。45年のインターハイでは、ヨットの女子S級で、高23回の友部美恵子・鈴木敦子両氏は全国優勝している。昭和50年代から60年代にかけて女子の数は増え続け、女生徒の割合は二割を超えるようになり、59年のインターハイでも、ヨット部女子がFJ級で全国優勝を果たし、62年には女子剣道部が団体及び個人でインターハイに出場するなど一高女子の活躍が目立った。平成期に入ってから女子の数は増え続け、遂に全生徒の三分の一強が女子で占められるようになった。彼女たちにとって、もはや男子校の中の女子という意識は殆どない。校内にまともな居場所すら無く、肩身の狭い思いで一高生活を送った半世紀前の女生徒たちには考えられないほど、今の一高は女子にとって大変居心地の良い学校になっている。ところで、最初に女子が入学してから今年でちょうど六十年経つ。男女共学の歴史は創立百余年の半ば以上を刻んだ。この間、女生徒たちは少しずつだが着実に、土浦一高に自分たちの活動の場を広げてきたのである。蛇足的だが、平成19年度の本校の女子大合格者数を羅列してみたい。お茶の水6、津田塾15、東京女子15、日本女子11。これらの数字をどう見るかについては論評を控えたい。ついですが、冒頭の集合写真に写っていた男生徒の一人であった筆者には、六十年後の今、一高祭や野球応援など事あるごとに、校歌《亀城一千の健男児》を、初めは少し躊躇いながらも、やがては拳を振り上げ屈託なく声高に謳う本校女生徒が、新たな《我が校風を輝かせ》ている頼もしい担い手に思える。

平成 2 2 年 1 2 月 1 4 日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

今年、土浦市は市制 7 0 周年という節目を迎え、何とか往時の活気を取り戻そうと様々な方途の模索がなされました。かつて土浦は水陸交通の要地として賑わい、史跡や景勝地にも恵まれていました。しかし、今ではすっかり忘れられてしまった名所も少なくありません。本号では、こうした埋没してしまった土浦の景勝地の一つを、明治期の土中生徒の作文から紹介します。

常名の天神山

進修創刊号（明治 33 年 1 月刊）に「遊天神山記」と題した第二等級、田中久一氏の作文が掲載されている。その冒頭で、「天神山ハ、我方郷ヲ去ル一里、常名村ニアリ。閑雅幽寂ノ地、頗ル眺望ニ富ム。」と常名村の天神山を紹介している。常名村とは、江戸期から明治 22 年までの村名で、明治 22 年に、常名村は中貫・今泉・小山崎の 3 か村と合併し、都和村の大字の一つになる。昭和 23 年、都和村は土浦市に合併され、常名は現在の板谷町・中都町・並木五丁目・西並木町・東並木町・常名町・若松町と称されている地域である。従って、この作文が書かれた明治 30 年代には行政上の常名村は無くなっていたのだが、日常的には旧村名が使われていたものと思われる。いづれにしても、天神山は今の西真鍋・殿里の西に隣接する常名町集落の背後にある丘陵である。

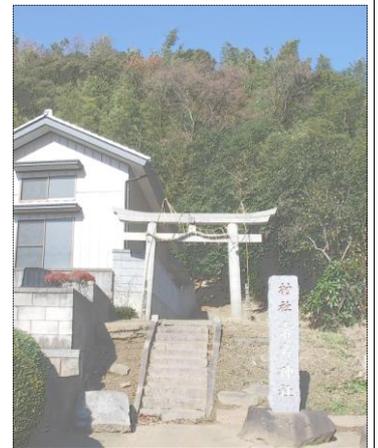
「今ココニ、明治戊戌八月、暑中休暇ニ際シ、初メテ登山ヲ果ス。此山甚高力ラスト雖トモ、巉巖峻峭、屹立スルコト數丈、岌乎トシテ墮チント欲ス。實二人ヲシテ、凜乎トシテ、毛髪ヲ堅タシム、即チ磴道ニ依テ、コレニ登ルニ、流汗淋漓漿ヲナシ、步履最モ惱ム。」

明治 31 年 8 月の夏休みに、初めてこの山に登ったとあり、この山はそれ程高くはないが、急峻であるため、登るのに大変難儀な思いをしたと記している。

「磴ヲ拾フコト數百級、漸ニシテ山腹ニ至シリ。」

数百段の石段を登って漸く中腹という表現から、かなりの高山を想像してしま

う。「仰ゲバ千年ノ古松ハ、蒼鬱トシテ天ニ冲シ



天神山への登り口



山頂付近の石段と松の切株

在する霞ヶ浦、その畔を煙を吐いて走る常磐線、そして男体・女体二峰が聳える筑波山も一望のもとにあると、この地の眺望の素晴らしさを讃えている。

忘れられた景勝地

ここまで、この作文を読んできて、現在の天神山に行ってみたくなった。本校から僅か二〜三kmの地点、都和南小学校の近くの筈だ。このあたりは、南東に開けた桜川の沖積低地に臨む新治台地の末端部に位置している。

台地面は畑地が広がっているが、台地の急斜面・崖の部分は雑木の森になっている。崖下の湧水など水の得やすい地帯は集落の立地条件に好適で、坂田・常名・殿里・真鍋・木田余と台地崖下に列状に連なった集落を形成している。

俯セバ錦ヲ疊ムノ新緑ハ、瀟灑トシテ今將ニ滴ラントス。清風自ラ足下ヨリ起リ、思ハズ肅然トシテ歩ヲ進ム。山頂ニ祠アリ。蓋シ菅公ヲ祀ルモノナリ、殿宇甚タ宏大ナラスト雖、雨繪霜描、只整然タル古色ヲ存シ、却テ徒ニ丹青ヲ塗ル、近時ノ廟宇ニ勝ルヲ感ゼリ。跌座再拜、廟前ヲ辭シテ眺望ヲ恣ニス。萬頃茫然、沈碧激瀾、新鏡ヲ開クガ如キハ霞湖ナリ。帆船ハ點々風ヲ孕ンテ、白鷺ノ飛ブカト疑ハレ。汽車ハ轟々煙ヲ吐イテ、黒龍ノカケルニ似タリ、雄峻奇聳、浮黛蒼翠、馬耳ノ立ツガ如キハ波山ナリ。」

山上に聳え立つ巨木や鬱蒼と茂る森に感嘆し、山頂に鎮座する祠を、古色蒼然で趣のある社殿であると崇め、白帆の点

台地の末端部分には小さな浸食谷が樹枝状に発達しており、浸食谷の間に取り残された部分は恰も独立した山といえるような地形になる。土地の人々の暮しと深い関わりを持った所謂里山で、地元ではこれを〇〇山と親しみを込めて呼んでいる。真鍋小学校前の「どんどん山」や都和南小学校近くの「弁天山」などがそれで、「天神山」もその一つである。従って標高は高が知れている。常名付近の台地標高は最も高い所でも 30 弱である（新治台地の一部をなす真鍋台にある本校あたりの標高は約 27 弱、である）。台地下の常名集落の海拔高度が 2〜3 段だから、その比高は 20 数に過ぎない。だから何も夏休みに改めて登るほどの山ではない。ちょっとした暇があれば、散歩がてらに行ける所だ。

文章にあるように、確かに天神山への

道は険しい。礎が数百段とあるのは大げさだが、百段余りの急勾配の石段が頂上まで続いている。山頂近くにあったという数本の古松は枯れてしまい、今はその切株だけが残っている。切株の大きさからみて、かなりの巨木であったことがわかる。ひととき高いこの松は、霞ヶ浦を航行する船の目印とされていたと地元の人には話す。かつての天神社は、八幡社や羽黒社など四社が合祀されて、今は常名神社と名を替えている。社殿も大正11年に再建され、本殿・拝殿ともに雨露を防ぐための上屋に覆われていて、その全貌を見ることはできない。なお、この社殿のある頂上帯は、五世紀前半古墳時代の前方後円墳で「常名天神山古墳」として、土浦市指定の史跡になっている。

幻の滝

さて、この後に続く文章が問題だ。

「眺ムルコト数時、去ツテ崖下ノ清流ヲ吸ム。混々トシテ岩一激シ碎ケテ玉トナリ、散シテ霧トナリ、漸ク下ツテ一條ノ瀑布トナル。落下数丈、股洩トシテテラ振ハシ、飛沫奔馳ス。ソノ状、水ハ崖ヲ懸ンテ啣ムカ如ク、崖ハ水ヲ怒ツテ蹴ルガ如シ。(以下省略)」

名文で綴られているこの急流瀑布の記述をどう現在の常名・天神山に見出したらよいか。

清流下って、一條の瀑布となり、数丈を落下して、山を震わし、飛沫奔馳するところがあるが、この記述通りの情景を素直にとれば、例えば日本百名瀑の一つである「袋田の滝」ほどのものを想定してしまう。常名界限に、そんな大きな流れは全くない。小さな沢すら見当たらない。それは、今も昔も同じだ。

常名の天神山に急流の谷川が存在することは地形的条件から見ても無理である。急流瀑布を有するような谷川は、背後に広大な山地を有し、豊富な水源涵養地域がなければならぬ。天神山の斜面は前述したように乏水地域の代表ともいえる。洪水の後に台地上の雨水が一次的に斜面を流れることはあっても、常時流れ下る谷川など形成されることはない。

台地崖下の地層からは、台地の地下水が湧き水となって流れ出すことはある。そこから台地の浸食谷である谷津田などへ流れ出す小川はあり得るが、このような流れを「水は崖を啣み、崖は水を蹴る」

奔流として記したとは到底思えない。

そうであるとするならば、この文章の件(くだり)をどう捉えればよいのであろうか。彼は天神山に、人があまり行かない奥深い自然、つまり「深山幽谷」を求めたのではなからうか。低いながらも一歩踏み入れば、生い茂る樹林や険しい山容に「深山」を感じ、仄暗い樹間に見える隠れる山肌の一角に「幽谷」を思い描いたのかも知れない。それは、天神山急崖が形作る空間構成が醸し出す情誼から、枯山水の庭園を観るような視点で捉えた渓谷であったともいえる。

そう読み解くことで、天神山は彼の想いと重なる「山水」の世界であり、郷土に、この山紫水明の地があるのだと誇らしげに述べていることが理解できる。

土浦の人気スポット・天神山

ここで参考までに、『進修』第3号(明治34年7月刊)に掲載された第四年級・月笠子なる生徒の「土浦附近の勝地を記し併せて我同窓諸子に望む」という一文に天神山を記した部分がある。

「土浦町を去る一里程、常名村にありて閑雅幽寂、頗る眺望に富むの一丘、之れを天神山と曰ふ、丘甚だ高からずと雖も、屹立すること数丈、九折の坂路に沿って登れば、古杉古松鬱蒼として陰をなし、晝なほ日の光を見ることがあたはず、丘頂菅公をまつるの祠あり、殿宇廢朽と雖も皆古色を存し、人をして凜然神威のあるところををしらしむ、堂に憑つて眺望を恣にすれば、丘下一眸の外にいでず、碧波漾々として際なく、白帆出没するものは霞湖にして、遙かに西南の方にあたりて雲耶雲にあらすと疑はしむるのは富士の山なり、北は遠く林間をへだてて小田筑波の諸峯高

く雲表に聳ゆるを見る、真に一幅の活図畫なり、(以下省略)」

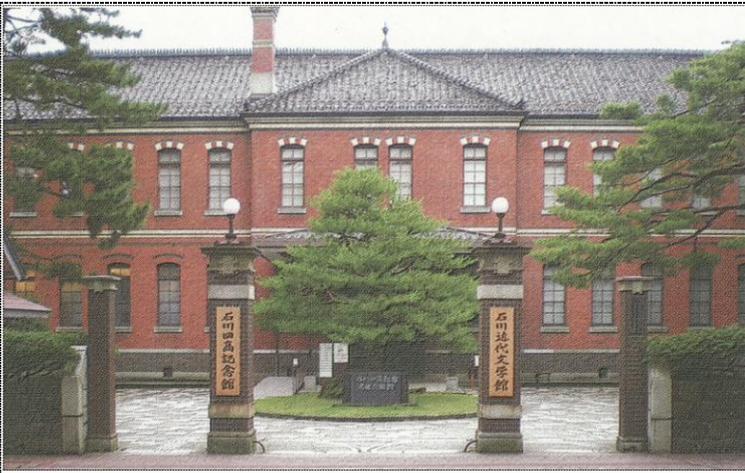
先の田中氏の文章によく似ている。例えば、「我力郷ヲ去ル一里、常名村ニアリ」と「土浦町を去る一里程、常名村にありて」、「閑雅幽寂ノ地、頗ル眺望ニ富ム」と「閑雅幽寂、頗る眺望に富むの一丘」、「此山甚高力ラズト雖トモ」と「丘甚だ高からずと雖も」など殆ど同一の用語が使われている。もしかしたら、月笠子は田中氏の雅号だったのではなからうか。そう考えて当時刊行された数刊の『進修』を丹念に調べてみた。創刊号にあの名文を発表した田中氏の作品は、その後刊行された『進修』のどれにも見当たらない。田中氏の同級生であった山口剛・中山庄一郎・菅谷軍次郎らは卒業するまで揃って『進修』各号に作品を発表し続けている。ただ、『進修』第2号(明治33年9月刊)巻末の「雑報」の中に、雑誌部委員としての田中久一の名前が山口剛や中山庄一郎らと共に記されていた。あくまでも推測に過ぎないが、田中氏は『進修』への執筆よりも、その編集に力を注いでいたのではなからうか。月笠子が田中氏の雅号であったかどうかはさて置き、『進修』各号には修学旅行の紀行文をはじめ、休暇を利用しての旅を綴った作文が数多く載せられている。筑波山・霞ヶ浦はもとより、真鍋の総宜園、高津の西施岡や愛宕山、常名の天神山などは、当時の土中生にとつて格好な逍遙の地だったのである。

なお、この作文を書いた田中久一氏をはじめ、文中にある山口剛・中山庄一郎・菅谷軍次郎各氏はいずれも本校が分校として創設された際、最初に入學した第一期生であったことを付記しておく。

A c a n t h u s

第 3 1 号

平成 2 3 年 1 月 1 8 日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会



旧四高本館（現石川四高記念文化交流館）

当活用委員会が毎年夏に行ってきた他県文化財校舎視察研修が今年度は、諸般の事情で実施できませんでしたので、冬休みを利用し、プライベートな旅行という形で、かねがね訪れてみたいと思っていた金沢に、有志数名で行ってきました。折からのクリスマス寒波に見舞われ、霰や雪の降る寒い金沢でしたが、お陰で趣のある雪の兼六園も観ることができました。お目当ての旧制第四高等学校本館はさすがに立派でした。

ライトアップされる赤煉瓦校舎

「学都」金沢のシンボルとなっている旧第四高等学校本館は、明治22年6月に起工され、同24年7月に完成した。設計は、当時文部技師であった山口半六、久留正道によるもので、赤煉瓦造り二階建ての建物である。明治27年には、第四高等学校（注）と改称し、創立以来約60年間数々の人材を政財界や学界に送り出してきた名門校であった。

旧四高は昭和25年、学制改革により閉校され、新制金沢大学法文学部と理学部の前身となった。四高本館は理学部のキャンパスとして昭和39年（1964）まで使用されていたが、その後は裁判所、郷土資料館などに利用されてきた。旧本館は昭和44年3月に国の重要文化財に指定され、熊本の五高などとともに、近代日本の高等教育機関の黎明を今に伝える全国でも数少ない建造物として貴重なものである。



旧四高本館内部（廊下）

本校旧本館より、十余年前に竣工した建物だが、堅牢な煉瓦造りで保存状態もよく、現在は、「石川四高記念文化交流館」として金沢を代表する文化の発信拠点としての機能を発揮している。旧本館は、四高の歴史と伝統を伝える展示に加え、旧四高の教室を多目的に利用できる「石川四高記念館」と石川県ゆかりの文学者の資料を展示する「石川近代文学館」によって構成されている。これは、兼六園周辺文化の森の新しい「学びとふれあいの複合文化スペース」として、平成20年に整備され、リニューアルオープンしたものである。



旧四高本館復元教室

旧制金沢二中は、本校とほぼ同時期に開校し、めざましい発展を遂げ、幾多のすぐれた人材を世に送り出してきた北陸地方きっての名門校であったが、戦後の学制改革に際し、閉校になってしまった。旧二中校舎は、昭和23年に発足した新制中学校の校舎に転用されることになり、



旧制金沢二中校舎（三尖塔校舎）

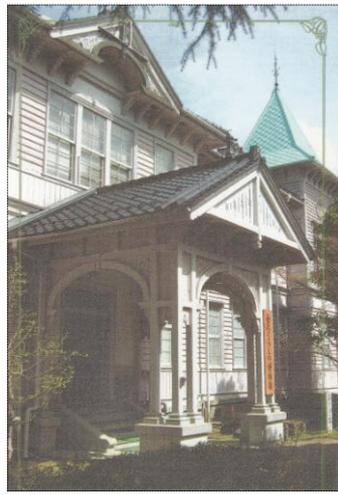
ど観光面での存在感も大きい。旧制石川県立金沢第二中学校校舎は、特徴的な尖った塔をもつ建物として「三尖塔校舎」の愛称で呼ばれている。明治32年（1899）、開校と同時に建てられたというから、本校旧本館より少し古い。この建物は、入り組んだ屋根、車寄せ、上げ下げ窓など明治の洋風木造建築の様式を色濃く残している。尖塔を有する屋根や煉瓦を積み上げた土台、縦長の上げ下げ窓など本校旧本館と共通するものが随所にみられる。

旧校舎は博物館に

ど観光面での存在感も大きい。

昭和45年まで金沢市立紫錦台中学校として使用されてきた。昭和49年に金沢市の文化財に指定され、昭和53年には「金沢市立民俗文化財展示館」として開館された。その後、平成11年に石川県有形文化財の指定を受け、平成19年に「金沢くらしの博物館」と改称され、金沢市によって運営されている。

旧制金沢二中本館専寄せ



旧四高校舎に比べ、地味な存在で、金沢市民の知名度もあまり高くない。兼六園前で拾ったタクシーのドライパーも、行き先に「旧制二中校舎」または「くらしの博物館」と告げても、しばらく思案顔をしていた。

建物は、明治の西洋風木造学校建築様式を残している立派なものだ。本校旧本館に比しても決して見劣りのするものではない。ただ、この施設をより有効に活用しようとするあまり、床を全面的に張替えたり、冷暖房設備を取り付けたりと、建物に手を加え過ぎてしまった。結果、国重要文化財としての基準を満たすに至らなかったのである。ちよつと残念なことである。

孤独な三尖塔校舎

もう一つ、訪れてみて感じたことは、

この旧校舎全体から「旧制金沢二中」の息遣いが伝わって来ないことだ。展示物として旧制中学時代の資料があまり無いことにもよるが、それだけが原因ではない。この由緒ある「三尖塔校舎」が戦後、市の新制中学校校舎として、旧制二中から切り離され、その後も、金沢市の公共施設としての利用が続き、旧制第二中学校校舎のイメージが薄れてしまった。

一般に、現金沢錦丘高校が旧制金沢二中を前身とした学校であると称されているが、果たしてそう言い切れるであろうか。昭和三十年代後半より、高校入学志願者の急増に因應するため、全国的に県立高校の新設・学級増が行われた。石川県でも昭和38年、石川県立高等学校設置条例により、普通科、家政科（募集人員普通科五百名、家政科百名）の全日制高等学校を金沢地区に新設されることになった。この際、金沢二中の同窓生諸子の間から後継校を切望する声が盛り上がり、県への働きかけを強め、この新設校を旧制金沢二中を継承する学校として発足させたのである。

金沢錦丘という校名は、旧金沢二中の校歌の文言から取り、校章も二中の梅鉢に4つのペンを加えたものを採用するなど、旧制金沢二中との一体感を努めきた。確かに名目的には後継校である。しかし、校地は二中時代とは別の場所であり、校舎も新築されたもので、旧制金沢二中を偲ぶ形あるものは皆無である。

一旦閉じられた学校が、長い年月を経た後再開校し、旧校の遺産を引き継ぐということは、そう簡単なことではない。学制改革後の空白期間が余りにも長過ぎ、その部分を埋め戻すのは容易ではない。

何とかあの「三尖塔校舎」で実際に学んだ卒業生たちが細々と二中の伝統を担ってきていたが、その彼らも今や高齢化し、旧制中学時代を語り継ぐOBの数はめっきり減ってしまった。先にも触れたように、二中の歴史が刻み込まれた明治の学び舎は、学校の手を離れて久しく、市の一施設になっている。「三尖塔校舎」はもはや旧制二中の後継校を称える錦丘高校のランドマークにはなり得ていないように思える。改めて伝統の継承の難しさを思い知らされると同時に、文化財校舎の在り様についても考えさせられた。



旧制金沢二中本館玄関ホール

(注) 明治期の官立(国立)の高等学校

明治27年(1894)、高等学校令が公布され一高(現東大)・二高(現東北大)・三高(現京大)・四高(現金沢大)・五高(現熊本大)が設置され、明治33年(1900)に六高(現岡山大)、翌34年に七高(現鹿児島大)、41年(1908)に八高(現名古屋大)が加えられた。

これとは別に、軍人養成学校として陸軍士官学校(明治7年創設)と海軍兵学校(明治9年創設)があった。

明治19年(1886)の帝国大学令により、北海道・沖縄県を除く全国を5区に分割し、それぞれに高等学校を設置することが定められたが、このうち新潟・富山・石川・福井の北陸4県からなる「第4区」では、金沢に石川県専門学校(その前身は加賀藩の藩校明倫堂および維新後に設立された金沢中学校)を母体とする高等学校が置かれることとなり、第四高等学校の設立となった。(開校に際し旧藩主前田家は7万8千円を寄附している)さらに設立時に金沢医学部を「四高医学部」として合併したが、後に金沢医学専門学校として分離した。

雪の兼六園



平成23年2月15日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

左の写真に見覚えがありますか。今から百年余前の土浦中学校合格通知書（はがき）です。間もなく卒業を迎える3年生諸君が本校入学直前の合格者説明会に出席された際、配られた『Acanthus』新入生歓迎号に掲載されたものです。本校に関わる古い資料に触れることで、新入生であった皆さんは本校入学の意味合いを感じ取られたことでしょう。

『アカンサス』の発行始まる

進修同窓会では、在校生にもっと本校の長い歴史を知って欲しいとの思いから、土中時代から戦後の学制改革をへて今日の土浦一高に至るまでの数々の事跡を掘り起こして紹介しようとして、この小紙の発行を試みしました。それが、今から3年前の平成20年3月、現3年生の新入生歓迎号として創刊され、毎月（夏休みの8月は休刊）発行を続けてきた『アカンサス』です。つまり、『アカンサス』は現3年生と共に歩んできたことになりました。その皆さんも卒業というこの機会に、これまでの『アカンサス』三十数号から主だった事柄を断片的ですが抜粋してみました。

学校の創立は111年前の明治30年、茨城県立尋常中学校土浦分校として産声をあげました。大変歴史の古い学校なのです。このような全国有数の伝統校の一員になられた皆さんを心から歓迎いたします。

「今回選抜試験合格二付当校第壹年級二入学ヲ許可ス」と記された上の資料は、明治36年4月13日付けの本校合格を通知した郵便はがきです。この土浦中学校合格通知書を手にした菊田禎一郎さん（中7回生）も皆さんと同じ思いで、幾度となく読み返したことと思います。明治30（1897）年以来、同じ感慨に身を委ね、未来に大きな夢を羽ばたかせた少年が毎年春には生まれました。そして今、君たち327名は同じように夢と希望を抱く百十二回目の少年となったのです。合格を心からお祝いすると共にこれから一高での限りない可能性への挑戦を期待します。

【新入生歓迎号（平成20年3月）】

旧本館とアカンサス

旧本館には、数多くのしかも様々な装飾が施されています。その中でもこの建物のシンボリック的存在と言っても過言でない装飾があります。それが「アカンサス」という植物の花と葉をモチーフにしたデザインです。



土浦中学校真鍋新校舎

『進修』第6号（明治38年4月）より

右の竣工間もない真鍋台新校舎の写真を見て下さい。正面玄関屋根及び左右両翼の切妻破風の頂点に十字架の様な飾りが見えますね。これこそ、かつて、四弁の花が雄大に咲き誇っている「アカンサス」そのものなのです。

残念なことには、今は三つともありません。代わりに正面玄関上には貧弱な四角錐の飾りがあるだけで、左右の破風には面影すらありません。しかし、「アカンサス」が全く消えてしまったわけではありません。正面玄関の三連アーチの柱頭部に「花」を、東西の通用口の軒の屋根には「葉」を象った装飾が現存しています。

【第4号（平成20年7月）】

重文の旧本館

それにしても県の文化財保護審議会委員でもあった一色史彦氏の業績は大きい。

それは、彼が昭和49年8月、土浦一高本館の正面玄関屋根裏の小屋束に釘打ちされた一枚の棟札を発見し、設計者駒杆勤治の存在を明らかにしたこと、同年9月に龍ヶ崎一高に保管されていた設計図を調査することで、これら建築物の文化的価値を確認した。その結果、土浦一高旧本館と太田一高旧講堂は、旧制中学校校舎としては全国で初めて国の重文指定を受けたのである。因みに本校旧本館の棟札には、

表「上棟式 大棟梁茨城県技師工学士駒杆勤治」

裏「明治卅七年七月五日 請負人石井権蔵」

とあり、発見者の一色氏は「明治の茨城に開花した駒杆勤治」（『常総の歴史』第22号）で、一般に建造物の文化財指定で棟札という資料は重要なものであり、とくに旧本館の棟札は建築史の世界では第一級の資料であるとして、昭和51年2月3日、本館と共に文化財に指定されたのだと述べている。

「思い出がいっぱい詰まった旧講堂は、今なお威風堂々と母校の北側に残っている。百年を超える太田中、太田一高の歴史をじっと見続けてきたに違いない。『益習の百年』（太田一高百年史）と記しており、母校のモニュメントとしてその役割を果たし続けている。」

「国の重文に指定された太田一高の旧講堂と同じ設計で同じ時期に竣工した旧水海道中の講堂は、昭和48年に老朽化のため取り壊された。講堂内部の部材の一部や玄関車寄せの柱頭飾りなどが保存されているものの、この時点で旧制水海道中時代を物語る建物類は全て姿を消したのである。」

『済美百年』（水海道一高百年史）には、「こ



のセミナーハウスの基本設計図が同窓会役員会で初めて公開された時、思い出深い旧講堂の外観を模した設計は大好評で、出席者の間からは「口々に『ああ懐かしい。昔の講堂によく似ている。これはいい』との声が上がった。」と記されている。それだけに、平成12年に、外観を旧講堂に模したセミナーハウス（亀陵会館）の完成は同校卒業生たちにとって往時を偲ぶ拠り所となった。」

【第8号（平成20年12月）】

《宝の持ち腐れ》にしないために

全国には、文化財の指定こそ受けていないが草創期の校舎を有する高校は数多くある。移築改装して記念館・資料館・現役教場として保存・活用している例が多い。

重文指定の校舎では、通年一般に公開されている「厳浄閣」（旧富山県立農学校本館）や郡山市の郷土博物館として開館している安積高校旧本館は、既然大がかりな解体修復を済ませ、文化財としての在るべき姿を確立しているといえよう。

本校旧本館は、限定的な公開に止まり、活用面でもまだまだの感があり、建物の保存・活用になお一層の創意工夫が必要である。

旧土浦中学校本館は、他の重文校舎と比べても決して見劣りするものではない。掛け値なしに第一級の文化財校舎である。しかし、専門家の調査で、眼に見えない建物内部にかなりの老朽化が確認されている。このままの状態が続けば近い将来、間違いなく朽ち果ててしまう。何としても全面的な解体還元修理による保存こそ緊急の課題である。その実現には、同窓生、地域の人々や県や国の理解と支援が必要である。

【第9号（平成21年1月）】

自前の土浦中学校歌

明治期に創立した旧制中学校では、校章は創立時に制定されているが、校訓や校旗、校歌は創立後相当の年月が経ってから制定された学校が多いようだ。

『済美百年』（水海道一高百年史）に校歌制定について「いずれの中学校も校歌誕生までに一〇年以上の歳月がある。これだけの年月を経ればその学校の教育目標や方針も確立（校訓や校是の制定）し「校風」も生まれるから、それを校歌に詠って学校への所属感や一体感をいっそう強めようという機運が生じたのであろう」と記している。

当時、校歌を作成するには作曲という困難な壁があった。したがって多くの学校では校歌つくりを専門家に依頼している場合が多い。こうした中で下妻中の校歌は異色ものといえよう。当時五年生二人の合作で横瀬夜雨が筆を加えた詩を、旧制一高の寮歌「嗚呼玉林に花つけて」の曲にのせて、生徒たちの間で自然に歌われ続けていくうちに校歌として認知されていった（『為校百年史』）といふ。そういえば、竜ヶ崎中の校歌も同様に、曲は旧制一高寮歌「アムール川」のものを借用している。

その点からすれば、土浦中の校歌はその作成過程からみて健気なものである。歌詞は生徒の公募によるもので、入選した四年生堀越晋の詞を本校教諭尾崎楠馬が補筆し、作曲した。国漢科主任でありながら、音楽にも堪能な尾崎青年教師の存在が、自前の校歌誕生を可能にしたのである。

歌われなかった三番

本校校歌は、一番で、筑波や霞浦の雄大な自然を、一番では、郷土の美しい季節の移ろ

いを、三番で、この素晴らしい風土に培われる若人の心意気を、そして最後の四番で、この学び舎での青春を誇らかに歌い上げている。

制定以来歌い継がれてきたこの校歌は戦後しばらくの間、三番が姿を消した。終戦後、戦前・戦中の軍国主義教育を排除し、民主化を進めるといふ政策のもと、全体主義的なものはタブーとされたのである。三番の「東国男児の気を享けて 我に武勇の気魄あり」というフレーズがこれに抵触するということから三番が歌われなかったのである。

それにしても、本校校歌の三番は全歌詞の主題をなす部分である。これを欠いた校歌しか歌えなかった当時の生徒たちが、三番の存在を知ってどんな感慨をもったであろうか。ともあれ、本校の校歌は生徒によつて生み出されたものであるだけに、説教がましくなく、曲も簡潔で歌いやすい。それでいて伝統校としての風格を感じさせる校歌である。

【第13号（平成21年5月）】

百年歌い継がれてきた校歌

本校の校歌は明治44年に制定されましたので、来年百年目を迎えます。字句等一部改変はあったものの殆ど元のまま現在に継承されています。【新入生歓迎号（平成22年3月）】

一高祭や野球応援など事あるごとに、校歌《電城一千の健男児》を、初めは少し躊躇いながらも、やがては拳を振り上げ屈託無く声高に謳う本校女生徒が、新たな《我が校風を輝かせ》ている頼もしい担い手に思える。

【第29号（平成22年11月）】

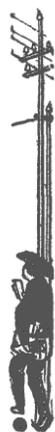
三万余の進修同窓会員

三万に及ぶ卒業生たちが築き上げてきた伝統と校風、百余年の風雪に耐えて響え立つ文化

財の旧本館、これらは何ものにも代えがたい本校の有形・無形の遺産である。君達はこの恩恵に浴しながら、今ここで学ぶことができる幸運を噛み締めると共に、この遺産の価値をさらに高めて、土浦一高の新たなビジョンを描いて欲しい。【第11号（平成21年3月）】

この春、本校生徒三十八名は米国への海外研修に出かけます。ハーバード大学、マサチューセッツ工科大学、スミソニアン博物館、マダケネディスペースセンターなど世界最先端の研究機関を訪れるものです。こうした普通では近づくこともできない研究所などで研修が可能になったのは、全米各地の大学や企業などで活躍している本校の卒業生たちが、土浦一高海外研修の企画を聞きつけて奔走してくれた結果なのです。同窓生の力強い支援に改めて土浦一高の伝統の力を感しました。進修同窓会は皆さんと共に在ります。

【新入生歓迎号（平成22年3月）】



今から考えると、この『アカンサス』も私どもの独りよがりな押し付けがましいものであったかも知れません。内容的にも皆さんの求めていたものとは必ずしも合致していなかったかと思えます。にも関わらず3年間お読みいただいたことを感謝すると共に、これから卒業した後も、本校ホームページを通して、折に触れ『アカンサス』とお付き合ひ願えればと希望しています。

創刊以来の『アカンサス』各号は本校のホームページ（進修同窓会）に掲載しています。

A c a n t h u s

第 3 3 号

平成 2 3 年 3 月 1 8 日
茨城県立土浦第一高等学校
進修同窓会旧本館活用委員会

← 全日制の同窓会入会式

去る 2 月 2 8 日、3 年生 3 2 7 名の同窓会入会式が行われました(定時制の入会式は 3 月 1 4 日、2 3 名が入会)。日頃同窓会とあまり関わり合いを意識していなかった皆さんにとっては、進修同窓会入会の意味合いをしっかりと捉えきれない部分があるかも知れません。そこで、今号では本校進修同窓会の「成り立ち」と、設立 2 5 周年(昭和 3 7 年)までの「同窓会の歩み」を紹介したいと思います。

明治の土中同窓会

旧本館の前庭に「沃野一望数百里」の校歌碑が建っている。これは昭和 3 7 年、進修同窓会結成二十五周年を記念して建設された『アカンサス』第 1 3 号(平成 2 1 年 6 月刊)とあるから、本校の同窓会が結成されたのは、昭和 1 2 年ということになる。どのような経緯で誕生したのか。この時点で開校してから四十年も経過している。それまで同窓会らしきものは無かったのか。早速本校の歴史を知る上で欠かせない校友誌『進修』を繰って見た。

「第一回卒業生で心栄誉と興望を荷ふの時に至れば僅か三十二名なりけり あはれこの同窓の人々は前世いかなる縁かありけん 朝な夕な共に築み共に悲しみ同じ師の君の恵に浴して同じ歴史を有さんと 落下流水春行かんとなす友また散らんとす昨日の友相見る能はず昨日の恩師仰かんに處を異にすさばかりふかきえにしの吾人離別と共にかはるべきにあらず ここに旧来の友誼を維持し師弟の關係も親密にせんとて同窓会を組織しぬ 三月二十八日卒業式の終りし後この事を議し七月を期して第一回を開かんとし中山酒井両氏を幹事とせり『進修』第 4 号(明治 3 5 年 9 月刊)とあり、明治 3 5 年 7 月に第 1 回卒業生十六名が校長以下教員十五名の参加により、第一回同窓会が開かれていた。六条からなる次のような規約も定めている。

第一条 本会は師弟の關係同窓の友誼を保持するを以て目的とす

第二条 本会は土浦中学校卒業生を以て會員とす

第三条 本会の事務を処理せしむる為め會員互選を以て幹事二名を置き任期を一ケ年とす

第四条 會員は動静を通知すべし
第五条 會員の移動は雑誌進修の紙上に於て報告すべし

第六条 本会は一月及び七月に開會す
附則 規約の条中変更を必要とするときは集會の時議定すべし

正に立派な同窓会が誕生したのであるが、会の成長発展は必ずしも順調では無かったようだ。

「業を卒へてから、各方面に活動している同窓の友誼が一月と七月とに、相会して、もとの儘の気兼ねなく知識交換否情交を温めたい学校との關係も厚くしたいと組織せられたのが、この同窓会で、三十五年七月に第一回を開いたのを始めとして、三十六年に二度、三十七年に二度開いたのである。三十八年の一月は時恰も日露の戦役中で、會員中に召集せられたものも多く、滿韓の荒野に露堂の苦しみを嘗めて居るものも多いので、開いても多く集まる見込みがなかった。で幹事の相談で開かぬ事とした。『進修』第 7 号(明治 3 9 年 3 月刊)とあるように日露戦争で開けなかつた時もあったが何とか会は維持されていた。

「三十五年七月に第一回を開いてから丁度八回になる その間に著しい発達もせず また多くの巧果も収め得なかつた。これは會員が増して来て一面識もない人が多くなり又職員の方にも更迭があつて勢盛んといふ訳にゆかないのかも知れない、されどこの儘において盛大にならうか否衰微する計りである。組織が面白くないといふ者もありさうだから今度の第九回からは学校でやらう。多年ヤンチヤンをきめた旧校舍に集合するといふ事だけで大なる興味を与へるであらう。況や旧師旧友に会ふといふ事あるをやだ。また職員の方でも出席者が多くならう。師弟の關係及び意

思の疎通にもよからうといふので一月三日ときめた。『進修』第 1 0 号(明治 4 0 年 4 月刊)

明治 4 0 年 1 月には第九回同窓会が五十三名の教員・卒業生の参加により、学校を会場にして行われた。ここで、本文七条、細則六条・附則からなる同窓会規約が決議された。その主な内容は卒業生相互の親善協力と母校の発展を目的とするという抽象的なものであった。しかし、その翌年の明治 4 1 年 1 月の例会に出席した卒業生は二十九名、同年 7 月の例会は筑波山登山が計画されたが、参加者は十一名という有様、明治 4 3 年 1 月例会に至っては幹事会の集まりも悪く、開會されていない。後、元本校校長の山口勇吉氏(中 2 7 回)は「創立当初は卒業生数が毎年四、五十名ぐらいであり、したがって同窓会の出席者も少なく、いつの間にか有名無実のものとなつてしまつたようである」『進修百年』平成 9 年 1 1 月刊)と述べているように、会は発展することなく、大正 2 年、遂に解散してしまつた。

東進会誕生

先の山口氏によれば、「幸いなことに、大正末期か昭和初期頃から(推定)在京土浦中学校同窓会が結成され、海軍主計中將・武井大助氏(中 3 回)を中心として毎年總會が開かれていた。昭和十年六月二十日には在京同窓会が銀座の鹿鳴館で開かれ、出席者五十数名で盛大であった。(中略)遙かに母校を偲んで懐旧談に花が咲き、和やかに盛大な会合であった」(『土浦中学校同窓会報第 2 号』昭和 1 1 年 1 月刊)と記している。

誠に奇妙なことだが、土浦中学校同窓会に先行する形で、その一支部的な東京の同窓会が独り歩きを始めていたのである。

暫定同窓会の結成

こうした在京同窓会の活発な動きに刺激されて、地元土浦にも漸く同窓会結成の機運が生じてきた。昭和9年4月、当面三十三回以降の卒業生を以て組織するが、全卒業生による同窓会が結成された場合には、それに合流するという暫定的なものではあったが、土浦中学校同窓会が結成されたのである。

新たに定められた規約の第二条には「本会ハ会員ノ親睦ヲ図リ、母校ノ発展ニ資スルヲ以テ目的トス」とあり、その他の条文も殆ど明治期の同窓会とあまり変わっていないが、第十二条に「本会ハ毎年一回会報ヲ発行シ会員ニ頒ツ」という具体的な活動を規定している点は、何とか停滞的な親睦団体から脱却しようとする意欲が示されている。



第1回同窓会総会出席者一同
(昭和9年8月5日)
土浦中学校玄関前で



同窓会報1・2・3号

進修同窓会の誕生

昭和11年、竜ヶ崎中学より赴任してきた宗光李太郎校長は同窓会に対する関心が深く、結成に向けて積極的に動いた。「土浦中学のような長い歴史と伝統のある学校に、全体同窓会のないのは可哀しいことだ。早急に結成の準備をするよう」と関係者を大いに督促した。

翌十二年の四月二十二日に、母校講堂で創立四十周年記念式典が挙行された。そしてこの記念すべき年に全体同窓会を結成しようという議題が、満場一致で可決された。

かくて同年十月二十四日、待望久しかった全体同窓会の発会式が来賓、卒業生多数参列のもとに母校講堂で盛大に挙行された。そして会名を《進修同窓会》とし、(中略)会規約は大體、暫定同窓会及則に準じ、年一回の総会を四月の第一日曜日に開催することが決定された。(中略)そして在京土浦中学校同窓会は、これを東京支部として進修同窓会に包含されるにいたった。《進修百年》平成9年11月刊)

こうした経緯で誕生した「進修同窓会」だが、この昭和12年は、盧溝橋事件を

きっかけに日中戦争が勃発した年である。翌13年には国家総動員法・国民徴用令が公布され、戦時体制強化が進められるといった情勢下で、同窓会活動も様々な制約を受けた。昭和16年には太平洋戦争に突入し、教育の場においても、皇国の道に則る全体主義的教育が強化されるようになった。

このような時勢の流れの中で、当時、大政翼賛会茨城支部の庶務部長であった菊田禎一郎氏(中7回)は宗光校長らに諮り、進修同窓会の事業として、幕末の勤皇思想家・佐久良東雄の歌碑建設を提案した。

東雄は真鍋村(現土浦市真鍋)善応寺の住職であったが、後に仏門を去り、倒幕運動に加わった。彼は和歌もよくし、「すめらぎに つかえまつれとわれをうみし わがたらちねぞ とうとかりける」という忠孝両道を詠んだ。太平洋戦争が日ごとに険しさを増す時局に、この歌は一億玉砕の戦意昂揚に果たす上で大いなる意義があるとして、同窓会は東雄の歌碑建設を決めた。

進修同窓会の募金を主とする建設資金により、昭和19年4月に歌碑は完成し、母校本館前に建立された。

この歌碑建設は、進修同窓会にとって、設立以来最初の事業といふべきものであったが、皮肉にも建立後一年余で終戦となり、国家主義排除政策で、校庭地中に埋められてしまった。(注 昭和29年、歌碑は掘り出されて、東雄にゆかりの深い善応寺境内に再建された。《アカンサス》第24号参照)

また戦時中、校地に隣接する農地をなかば強制的に買収して、グライダー練習場としていたが、戦後その土地の返還要

求運動が起こった。これに対抗して練習場跡の校地を確保したいとする学校を応援して、同窓会はPTAと共に、強力な校地保全運動を展開し、母校愛に燃える多くの会員諸子が尽力して解決に導いた。昭和32年、同窓会員の旧ポット部仲間が中心となって、母校にポットを寄贈し、土浦一高にヨット部を誕生させ、その育成に努めた。このことを機に、同窓会は土浦一高の生徒会諸活動の支援にも積極的に乗り出した。

昭和37年、進修同窓会は結成二十五周年記念事業として、母校に校歌の碑建設を決め、翌38年10月、本館前庭で校歌碑除幕の式典が盛大に挙行されたのである。この後、同窓会は一貫して母校の教育活動の支援を続けてきており、同窓会予算の多くを、生徒の部活動補助などの生徒奨励費・生徒活動補助費に割いている。(同窓会予算の詳細については、毎年12月に発行される『進修同窓会会報』を参照されたい)

このように、本校の同窓会は単なる親睦団体ではない。常に母校に寄り添って土浦一高と共に輝かしい伝統を担い続けるある種の運命共同体ともいえるよう。



平成22年度 定時制卒業式

於同窓会館(アリーナ) 3月14日

卒業式後、学習館で同窓会入会式が行われた